日田文化

68

2026.3

日田市

序文

日田市は、北部九州のほぼ中央、大分県の西部に位置しています。

先人たちは、市内を流れる三隈川の豊かな水流を利用してきた一方、もともと日田盆地は川原地形なため、水害常襲地帯でした。加えて土地は水持ちが悪く、水利の便は決して良くない場所でありましたが、江戸時代後期に廣瀬久兵衛らが小ヶ瀬井路を開削し、市内に水路を巡らせ、水との共生の道を目指し、本市はいつしか「水郷」と呼ばれるようになり、「水郷日田」として今も人々に親しまれています。このような土地で生まれ、育まれた文化や歴史を広めることを目的として、『日田文化』は発行されています。

また、中に収録されている年次報告は文化財への取組を広く発信することを目的とし、日田市の文化財部局が実施した事業の概要等を掲載しています。

さて、本書には年次報告のほか、二本の原稿を掲載しております。段上 達雄氏には重要無形民俗文化財「日田祇園の曳山行事」に欠かせない山鉾や懸装品について、また、大神 信證氏には、「お正月」に纏わる言葉の由来や作法等についてのご寄稿をいただきました。どちらの原稿も、それぞれの事柄についての歴史的背景を知ることができる大変興味深い内容となっております。

本書が、本市の歴史文化の解明に資するとともに、文化財保護の取組への理解や、その普及の一助となれば幸いです。

今回執筆していただいたお二方はもちろん、日頃より本市の歴史文化の継承・発展にご尽力をいただいております方々に対し、心から感謝申し上げます。

最後に、昭和三十一年から発行してきましたこの『日田文化』ですが、今回の六十八号をもって一時休刊といたします。創刊号発行から半世紀以上が経過し、文化財を取り巻く環境や啓発手段が大きく変化している昨今、時代にあった『日田文化』の在りかたについて模索するため、休刊を決定した次第です。

関係者の皆様には、今後も変わらぬご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和八年三月

日田市

例言

一　本書は、日田の原始時代から近現代に亘る歴史や文化について、調査・研究した成果を周知することを目的に、機関誌として昭和三一年（一九五六年）に創刊された『日田文化』の第六十八号である。

二　本書には、論考・論文等のほか、令和六年度に日田市教育庁文化財保護課が、令和七年度に日田市文化スポーツ観光部文化財課が実施した事業の概要等を収録した。

三　本書は第六十七号からデジタル発行となり、日田市公式ホームページ上に掲載する。

四　「年報」部分について、横尾が作成した。

五　本書の編集は、横尾が行った。

目次

日田祇園の山鉾の歴史とその懸装品　段上　達雄　1

正月に行われる作法の由来　大神　信證　36

［日田市文化財（保護）部局年報］　38

Ⅰ．組織体制　39

Ⅱ．文化財の指定　42

Ⅲ．普及・啓発　49

Ⅳ．文化財（保護）課事業の概要　56

日田祇園の山鉾の歴史とその懸装品

段上達雄

はじめに

四〇年ほど前の日田祇園の調査

昭和五八年（一九八三）、染矢多喜男先生と共に日田祇園の民俗調査を行いました。大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（現大分県立歴史博物館）に勤め始めて、まだ二年ほど経ったばかりでした。それまで休日になると、バイクに乗って県内各地を見て廻り、ようやく大分県内の地理を実感できるようになった頃です。この調査は大分県教育委員会文化課からの指示で行ったもので、二月には聞き取り調査をして、七月の日田祇園祭りの現地調査では染矢先生と共に酷暑の中で隈・川原地区と豆田地区を歩き廻りました。当時、隈・川原地区では山鉾の巡行をしていましたが、豆田地区では山鉾の建造（組立て）を全くしていませんでした。そのため、昭和四七年（一九七二）に日田市無形民俗文化財に指定されたのは「隈の祇園会」でした。当時、豆田では店舗の土間で見送り幕や水引幕、扁額、山鉾図、墨書のある幕類の収納箱などを公開していました。豆田町一丁目、豆田町三丁目、平野町、八幡町、港町（田町）、中城町、春日町（横町）が幕類を披露していたのです。例えば、豆田三丁目では草野家、八幡町では片島質屋、平野町では岩尾薬舗の日本丸店、中城町では菓子製造の佐田屋が、それぞれ陳列していました。

大分県無形民俗文化財に指定

調査の翌年、昭和五九年（一九八四）三月に、調査成果は大分県教育委員会の報告書『天領日田の文化財』として刊行され、私は「日田の民俗」の章の中で日田祇園の「山鉾」の項を執筆しました。そして、三月三〇日には「日田祇園会」は大分県無形民俗文化財に指定されます。当時、染矢先生は大分県文化財保護審議会の委員だったのです。

これが私の日田祇園との最初の出会いです。それでは日田祇園の山鉾と見送幕・水引幕などの懸装品の特徴とその歴史について基本的なことを見ていきましょう。

一、日田祇園

（一）日田祇園の祭礼次第

現在、観光ポスターなどで「日田祇園」と紹介されていますが、かつて日田の祇園祭りは三ヵ所で別々に行われていました。隈と竹田、それに豆田です。隈地区は隈八坂神社、竹田地区は若宮八幡宮、豆田地区は豆田八阪神社の祭礼でした。まず、大正一三年（一九二四）に隈と竹田が相互に神幸と山鉾巡行を行うようになって統合されます。そして、平成元年（一九八九）には、隈・竹田地区と豆田地区のすべての山鉾が勢揃いする「日田祇園山鉾集団顔見世」が始まりました。これによって、日田の祇園祭りは単なる二地区の祭りではなく。それぞれ独立しながらも総称としての「日田祇園」として一体化したものと考えられます。

日田祇園では、曳山であるヤマ（山鉾）」が巡行します。毎年、山鉾上部の飾りは作り替えられます。日田祇園に曳き出されるヤマは、隈地区の三隈町・大和町、竹田地区の川原町・若宮町、豆田地区の上町・下町・中城町・港町が出す八基の山鉾と平成二年（一九九〇）に製作された全高一〇mの平成山鉾の計九基です。

日田祇園の日程

日田の祇園祭りの祭礼日は、近世では隈町・竹田村が旧暦六月一〇日から一一日、豆田町が旧暦六月一四日から一五日でした。明治時代には三地域は共に旧暦六月一三日から一五日となり、昭和四六年（一九七一）からは新暦七月二〇日過ぎの土・日曜日に開催するようになりました。

小屋入り

祇園祭りの準備は「小屋入り」と呼ばれる山鉾の建造（組立て）から始まります。倉庫などに収納していた部材を用いて山鉾を組立てていたのです。建造には二週間ほどかかりました。昔は小屋を実際に建て、祭の一ヵ月前に小屋入りして、各戸から二〇代の青年が出て、山鉾の建造をしていました。水中から車輪を引き上げ、洗って軸棒に通し、台車を組立てます。棒鼻や四本柱、跳ね出しなどを取り付け、岩や屋台を載せていきました。昔は小屋入りの時の昼食は、握り御飯にキュウリの酢和え、冷や奴ぐらいで、道端に座って食べていたそうです。

最近は車輪を外して山鉾そのままで保管できる施設ができ、山鉾の台車などの組立を省略できるようになりました。隈・竹田地区では日田祇園山鉾会館に五基の山鉾を収蔵し、巡行時の姿を展示しています。山鉾会館の山鉾は一旦低くしてから、外で組み直し、テント式の背の高い仮小屋に納めます。

豆田では港町が平成元年（一九八九）に山鉾の格納庫を建て、続いて中城町も格納庫を建てました。上町と下町では平成三〇年（二〇一八）に念願の格納庫を建てました。

飾り付け

山鉾に飾りをつけます。華題に即した人形を飾りつけ、パイパイと呼ばれる波を表す白塗りの竹ヒゴを高欄の左右に並べ、松・梅・笹・あやめ・牡丹などの造花で飾りつけます。

山鉾人形と華題

山鉾人形のテーマである「華題（げだい）」は「外題」とも書かれます。華題は日田祇園独特の表記で、歌舞伎の演目を表す外題に由来するものです。現在、山鉾に載せる人形は、日田で唯一の人形師長嶋静雄氏が製作しています。歌舞伎の演目から、その年の華題を選んで決め、衣裳を用意して人形を制作するのです。人形の頭部は木造で、キリ（桐）やヘラ（シナの木）、ヒノキなどの木を彫刻して彩色したもので、明治時代に作られたものが多いそうです。これに胴体と手足をつけてさまざまなポーズをとらせ、衣裳を着せます。

パイパイ

祇園祭りが終了した後、山鉾の高欄の上を飾っていたパイパイを寄附してくれた家々に配ります。パイパイは白塗りした竹ヒゴで、波しぶきを表し、疫病除け・火事除け・魔除けになるそうです。造花をつけた丸めたパイパイを、玄関の上に吊している家を良く見ます。また、農家では厩にかけて、牛馬の安全を祈ったそうです。

神輿洗い

山鉾の巡行が行われる一週間前の日曜日の午前〇時に「神輿洗い」を行います。 神輿洗いでは、町内に疫病をもたらす神を白木の荒神神輿に引き連れて、三隈川で禊を行って流し去る神事です。 続いて「流れ曳き」を行って、山鉾巡行の安全を確かめます。

山鉾の運行方法と組織

山鉾の運行は、「山鉾押さえ」一名、「綱元」二名、「棒鼻」六名、「とも綱」二名、「後ろ押し」八名、「ブレーキ係」二名、「団扇あおぎ」二名、「曳き手」多数によって行われます。最高責任者は元締ですが、山鉾押さえが運行責任者です。「押さえ」とも呼ばれ、昼間は団扇、夜は提灯で指図しま

す。山鉾の前方約一〇mから一五mの所にいて、運行全体を看視しながら指示を出します。綱元は山鉾から五mほど前の曳綱の傍らにいて、曳き綱をさばきます。棒鼻は左右に三人ずつ棒鼻の棒の前部分に配置されます。先端に位置する一番棒は常に後ろ向きで、山鉾と家屋の軒先が接触しないように注意する役です。棒の内側にいる二番棒は押さえの指示を他の棒鼻に伝えます。棒の外側の三番棒は二番棒を補佐します。とも綱は後ろ押しの責任者で、押さえの合図を後ろ押しに伝え、綱や山鉾を横から押して棒鼻を助ける役目もあります。後ろ押しは背後から押して山鉾を前に進行させるのです。

運行を担当する者たちの組織があります。古い話ですが、三〇年ほど前の平成七年（一九九五）には、次のような状況でした。

・大和町一丁目（旧我有木町）は「我有木会」
・大和町二丁目（旧上横町）は「五日会」
・大和町三丁目（旧隈中町・下横町）は「棒鼻会」
・三隈町は青年たちが「十三日会」、壮年層は「十六日会」
・豆田上町・下町・中城町では各「棒鼻会」

ブレーキは板の下端を地面に落とす簡単な制動装置です。戦後に装着されるようになったもので、大和町の山鉾では昭和四三年（一九六八）頃に装着したそうです。

日田の山鉾には自動車のような便利なハンドルはありません。そのまま曳いて押してゆくと、ほとんどまっすぐしか進みません。山鉾の曲がり方を説明しましょう。棒鼻につく人のことも棒鼻と呼ぶのでは混乱します。ここでは仮に「棒鼻」と「棒鼻役」と呼び分けます。

山鉾の進行において直角に曲がることを「なま」と言います。右に曲がる場合、曲がる方向とは反対側の左から棒鼻役が棒鼻に「肩を入れ（肩で持ち上げ）」て山鉾前方を少し浮かします。そこで後ろ押しが山鉾後部を左側に押して、少し動いたら声を合わせて力を入れて回転させます。

山鉾をぐるりと一八〇度回転させることを「腰を切る」とか「腰切り」と言います。この時は山鉾から曳き綱と押さえ綱を外します。後ろ押しは棒鼻の後ろに体重をかけ、棒鼻全員が肩を入れて山鉾前部を持ち上げ、後輪だけで回転させます。

巡行中の山鉾の進行方向を左右に微妙に変えることを「答える」とか「答えろ」と言います。棒鼻も後ろ押しも、まっすぐ進んでいる時と同じ姿勢のままです。声で指示することはありません。少し左に向ける時、棒鼻役が棒鼻を右側から押します。

運行する者たちの安全のための次のような取り決めがあります。リーダーである押さえとサブリーダーの綱元は、綱から手を離してはならないこと。同様に棒鼻も棒から手を離してはならないこと。また、山鉾の運行に直接関わっている棒鼻などは、リーダーである押さえの指示にだけ従うこと、などです。これは事故防止のための決まり事なのです。

今でも棒鼻に土足で上がってはならないと決められています。また、昔は女性が山鉾を触ることは禁じられていました。このように、神聖な山鉾に対する禁忌（タブー）があったのです。

大分県内で最も暑い時期の日田祇園では、少人数の人たちによって、重くて不安定な山鉾の運行と操作が行われているのです。本当に日田祇園が好きでないとできません。そのような人たちが存在することによって、日田祇園は継承されてきたのです。

流れ曳き・集団顔見世

日田祇園の二日前の木曜日に「流れ曳き」をします。町内ごとに山鉾を巡行してお披露目を行うのです。「ゴシン（御神）入れ」といって、流れ曳きではまず最初に、山鉾に神饌（餅・米・鯛・野菜・果物・酒・塩）を供えて神事をします。そして山鉾に御幣と御神木の松を立てます。それから各町内

を巡行するのです。神事を祭り初日の朝にする所もあります。夕方からは日田駅前に九基すべての山鉾がずらりと並ぶ、「集団顔見世」が行われます。

町内押しと御神幸

隈・竹田地区では、祇園祭りの初日に各山鉾が「町内押し」といって各町内を巡行します。それから隈地区の山鉾は隈八坂神社、竹田地区の山鉾は若宮神社に入ります。その後、神幸行列に従って山鉾が巡行するのです。隈地区と竹田地区の山鉾は、隈八坂神社と若宮八幡宮双方の御神幸行列に随行します。隈・竹田地区の祇園祭りは、山鉾がそれぞれ他の鎮守社を参詣するという氏子圏を越えた行事を行っているのです。かつて隈地区の神輿は竹田地区にある御旅所まで行幸していました。御旅所は若宮八幡宮より一〇〇mほど手前にあったのです。

豆田地区では、祭りの初日の朝に八坂神社に山鉾が勢揃いして、中城にある御旅所まで御神幸行列に連ねて随行します。その後、地区内を山鉾ごとに定められた順路で巡行します。

晩山

夜には「晩山」が行われます。山鉾の背部に垂らした見送幕をはずし、代わりに提灯を下げるのです。この山鉾を「提灯山鉾（ちょうちんやま）」と言います。

隈・竹田地区では、祇園祭りの二日目の日没後、四基の山鉾が札の辻に集合します。それぞれの山鉾が全力疾走で札の辻に突入してくるので、とても迫力があります。そこで若者たちは山鉾を前後に揺さぶって気勢を上げ、隈・竹田地区の日田祇園は最高潮に達します。日田の山鉾にはハンドルがありません。集合時の駆け込みで、少しでもコースを外すと、家屋の軒先や看板にぶつかって壊してしまいます。昔は「家を壊してもお構いなし」と言っていましたが、現代ではそうも言っておられません。そのため、山鉾は車両として取り扱われるので、日田祇園の山鉾巡行の期間だけ自動車と同様に対物賠償保険に加入するのだそうです。

豆田地区の初日の晩山では、花月川にかかる御幸橋に集合してから、提灯山鉾が地区内を巡行します。二日目の晩山では、山鉾は中城御旅所に集合し、豆田の上町通りを抜けて、花月川に架かる一新橋に駆け上がります。ここで気勢を上げてから御幸橋と一新橋の間を疾走するように巡回するので、こちらも豪快なフィナーレといえます。

写真1：集団顔見世

写真4:川原町の山鉾

写真3:三隈町の山鉾

写真2:大和町の山鉾

写真7:豆田下町の山鉾

写真6:豆田上町の山鉾

写真5:若宮町の山鉾

写真 10:提灯山鉾

写真9:港町の山鉾

写真8:中城町の山鉾

写真 11:札の辻での共演

写真 12:花月川の橋の上での

(二)日田祇園囃子

日田祇園囃子の曲

日田祇園の特徴のひとつは、日田祇園囃子と呼ばれる独特なお囃子があることです。この日田祇園囃子は、江戸から移住してきた小山徳太郎が伝えたといわれています。現在の演目は幕末期から昭和初期にかけての俗曲や端唄、流行歌などです。「二上り」の曲が多く、「本調子」や「三下り」の曲は少ないそうです。この二上り・本調子・三下りとは、三味線の調弦の種類です。弦楽器である三味線は、異なる太さの弦を三本張り、指で押さえる場所を変えることで、様々な音階の音を出すことができます。一の糸・二の糸・三の糸の間の音程の違いなのです。

日田祇園の行事の節目ごとに定められた祇園囃子の曲を演奏します。これを「役物」と言います。山鉾が町内から最初に出る時、山元で奏すのが祝言曲の「花猩々」です。「花に浮かれて浮かれて、酒をいざや酌もよ・・・・」という唄のある出囃子です。「パイロン」は自分たちの町や先方の神社を出立する時の二上りの曲で、歌はありません。「吹上」は最終日の巡行後に自町に入る時に奏する曲で、「吹上観音様はあらたかな仏、一夜籠れば様に逢う・・・・」と歌います。祭りの最後に、山鉾が町の格納庫に入った時に奏するのが「萬歳」です。巡行中の曲は「道行き」といって、三〇曲以上あり、中には晩山で奏する賑やかな曲もあります。

演奏の最初に三味線弾きが三回歌うと、笛が揃ってくると言われています。また、演奏に集中するには「祇園キツネが憑(つ)かんとされん」と言っていたそうです。

楽器構成

京都祇園など他の祇園囃子とは楽器構成も曲目も全く違います。三味線と太鼓、それに笛で演奏するのが特徴です。三味線は中棹です。大太鼓は一人ですが、鋲打ちの平太鼓を鳥居台に吊り、締太鼓の小太鼓は座奏台に載せて、座ったままで両方の太鼓を打てるようにします。笛は五人ほどの奏者がひとつの山鉾に乗り込みます。

笛は奏者による自作で、中国の明朝から清朝頃に用いられた「明笛(みんてき)」系の横笛です。音程の整った音色の良い笛は、なかなかできないので苦労するそうです。良い笛ができると、管の内側を赤漆、外側は黒漆を塗ります。笛は長二尺二寸(約六六㎝)余りの横笛で、吹口(歌口)の他に手孔(指孔)が六個あります。吹口と指孔の中間の響孔に黒竹のチクシ(竹紙)を貼り、それが共鳴して笛の音を震わせます。竹紙といっても竹を素材にした紙ではなく、竹の稈(かん)の内側に生じる薄膜のことです。篠笛とは全く違う独特の音色が特徴です。また、管尻には飾り孔があって房のつい

た赤や紫の飾紐を通して下げます。ビブレーションの効いたこの独特な音色の笛の音曲を聴くと、あぁ、まさに日田祇園だなぁと思います。

山鉾での演奏

囃子方は山鉾の台車下段の囃子台に座って演奏します。山鉾一台の演奏者は三味線弾き一名、太鼓打ち一名、笛五名ほどで構成されます。低くて狭い囃子台の中に数名の演奏者が座ります。昭和二〇年（一九四五）の日本人男性の平均身長は一六〇㎝でしたが、八〇年後の二〇二五年の平均は一七二㎝です。その差は一二㎝。昔の山鉾の囃子台は低すぎるのです。それに囃子台の周囲は厚い水引幕で囲われます。夏の暑い時期なのに風も通りません。日田の祇園囃子の演奏者たちは大変厳しい環境の中で一生懸命演奏しているのです。

保存団体

かつて隈八坂神社近くに「小山組」、高瀬には「巴組」という祇園囃子の団体が活動していました。豆田地区にも「豆田組」と「才田組」があったそうです。昭和四四年（一九六九）に小山組が主導して統合され、「日田祇園囃子保存会」が結成されます。組の頃は奏法に少しずつ違いがあり、組によって得意とする曲目も違いましたが、保存会になって統一されたそうです。

三、祇園山鉾

（一）山鉾の構造としつらえ

山鉾の構造

日田祇園の山車を「山鉾」と表記します。「ヤマホコ」が正式の呼称ですが、単に「ヤマ」とか「ホコ」と呼ぶ人も多いようです。

図ーの「山鉾台車構造図」は私が昭和五八年（一九八三）の調査の時に描いたもので、まだ、山鉾の全高が低かった頃のものです。図は後ろに四本柱を立てた台車の構造を示しています。台車の前後方向の基本的な構造材として、下部両側面に置いた横木という厚板があります。その上に柱を立てます。豆田地区の山鉾は四本ずつで、隈・有田地区では三本ずつです。柱の上部近くと下部の二ヵ所に前後方向に貫を通し、下部の貫のやや上に横水平方向に根太を入れて長方体の台車が変形しないようにします。柱の上に前後方向に根太（桁）を乗せます。二本の根太には五本ずつの梁が水平に横組みされます。それに横方向の構造材として前方下部に「助け板（前板・車隠しともいう）」を縦にはめます。これは山鉾の前方で倒れた人がいた場合、車で轢かれないようにするための救命板で、厚いケヤキの一枚板です。これらの台車の構造材は全て堅木が用いられ、「ほぞ」と「ほぞ穴」や「セン（栓）」で結合されます。山鉾の台車の構造は、昔の民家建築の構造そのものなのです。

台車の構造材に堅木のケヤキ（欅材）やカシ（樫材）が用いられます。川原町と若宮の山鉾はケヤキを使い、三隈町と大和町ではカシを用いていたそうです。ケヤキは歪みや狂いが生じやすい欠点があるので、ザクという狂いのないまっすぐなケヤキを選ぶ必要がありました。戦後作られた山鉾の中には南洋材のラワンで作られた台車もありました。

台車の構造材の堅木に対し、四本柱は軽量で柔らかいスギの角柱が用いられます。四本柱の前方の二本は後ろから二番目の根太（梁）の上に立てられ、後方の二本は最後尾の下部の根太から立ち上げます。軽いスギを用いるのは、上部重量を軽減して重心を下げるためと、山や屋形などの飾りを取り付けるのに釘を使うので、傷んできたら、すぐに新しい材と交換するためです。

なお、助け板の真ん中に丸い孔が空いていますが、それは車輪の芯木に結

ばれた太い曳き綱を通すための孔です。

車輪のことを「ゴロ」と呼んでいました。車輪には輪切りにした太い赤松を用います。山鉾によって車輪の直径は違いますが、川原町のものは直径七〇㎝ほどで、幅が約三〇㎝です。方向転換する時に部分的に磨り減らないように、車輪の接地面に鉄箍をはめることもあります。車軸のことを芯棒といいます。芯棒は車輪と一緒に回転しません。八角柱状の芯棒に車輪を組み込み、横板にはめ込みます。その接合点は鉄で補強して、グリスを注入しています。昔、芯棒はクリ（栗材）でしたが、現在はカシを用いています。クリは水に強い堅木で、線路の枕木に用いられていました。油脂分の多い赤松製の車輪は乾燥すると割れるので、池や水槽の中に沈めて保管します。

山鉾のしつらえ

図２の「山鉾側面図」は飾り付けをして実働状態の山鉾を側面から描いたものです。これも低かった頃の山鉾の図です。

根太の上に板を並べて床にして、日田祇園囃子の演奏者が座る「囃子台」にします。そして、梁や桁のある所が天井になります。この上を「舞台」と呼び、最上部を「屋形」といいます。屋形には必ず造り物の松と御幣、それに町旗を立てなければなりません。また、ミニチュアの建物を屋形部分に載せ、必ず紙張りの岩も作ります。舞台の前方にはハネダシ（跳ね出し）を突き出し、その上に人形を載せます。舞台の左右には低い高欄を立て、その内側にパイパイを並べ、外に向かって拡げます。パイパイは波を表し、火事除けの意味もあるそうです。ハネダシの前方には「舞台額」という、その年の華題を書いた額を取り付けます。

なお、豆田上町の山鉾は、山鉾の背後に人形を載せます。これを「うしろ人形」と呼びます。日田祇園の山鉾の中でここだけです。

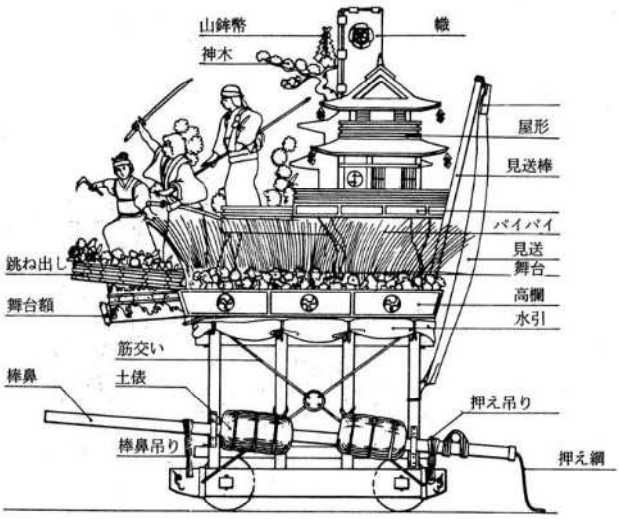


図２：山鉾側面図

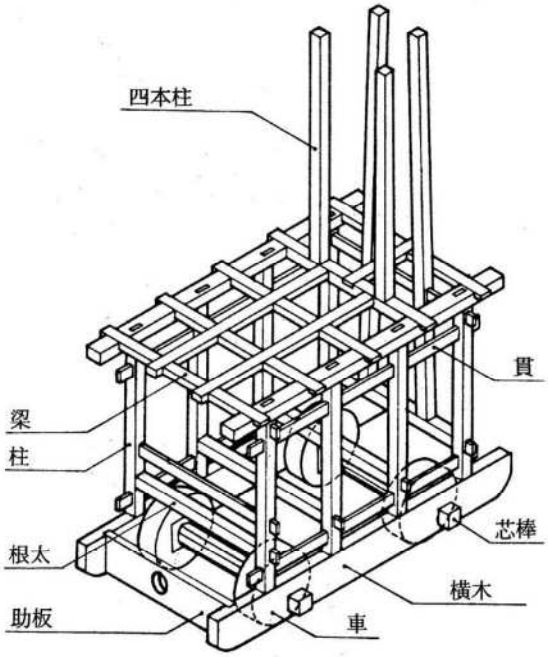


図１：山鉾台車構造図

舞台額とは別に、舞台前方に木製の「扁額（へんがく）」を懸けます。扁額は江戸時代のものが多く、額の文字は大和町（我有木町）の「哉報」、三隈町の「粛慎」、川原町の「霊運」（昔は「萬歳」）、下町の「應護」などがあります。港町（旧田町）の「感應」の扁額は文久二年（一八六二）の銘が記され、広瀬淡窓が書いたものだそうです。

棒鼻と土俵

台車側面に長い杉丸太を縛り付けます。左右にそれぞれ一本ずつです。台車前方側をやや高くして、後方よりも長く突き出します。これは「棒鼻」といって、方向転換する時に山鉾の前方を持ち上げるのに用いたり、進行方向を修正する時に操作します。棒鼻は最前列の柱と最後尾の柱に鉄金具で固定されています。その棒鼻の前方を横板と固縛する綱を「棒鼻吊り」といい、後方の綱を「押さえ吊り」と呼びます。棒鼻の最後尾には金具がはめられ、そこから綱が伸びています。この綱を「押さえ綱」といいます。棒鼻先端を担当する者も「棒鼻」と呼ばれ、最も脚光を浴びるため、山鉾運行の若者たちの憧れの役職になっています。台車附近の棒鼻に俵が二個ずつ縛りつけています。昔は川砂を入れて重しにしていたので、三個ずつとか四個ずつ縛り付けたこともあったそうです。これは山鉾の重心を下げるためで、最近は鋸屑を入れたりするそうです。

筋交いとカズラ

図では構造がわかりやすいように水引幕を巻き上げています。刺繍した緋羅紗の水引幕をこんな形で巻き上げません。木綿の水引幕なら可能です。水引幕で覆われるはずの側面部に鉄筋の筋交いが入っていることに気がつかれたでしょうか。この鉄筋の筋交いは前後にも取り付けられています。上端は根太（桁）、下端は横板にボルト止めされています。昔は筋交いはカズラ（葛）を用いて縛っていました。カズラで縛ると、一種の軟構造になるので、接合部分のほぞ穴やほぞへの衝撃が小さくなるので、傷みにくくなるそうです。フジカズラ（藤葛）やカンネカズラ（クズ＝葛）を用いていました。フジカズラの方が強靭だったそうです。

カズラで筋交いとして縛る時、ゼツミョウガケ（絶妙掛け）という縛り方をしました。棒鼻と柱などの間にカズラを何重にも巻き付け、真ん中に差し込んだ棒でねじって締め上げ、棒を根太や桁などに掛けて固定していたのです。

北九州市の戸畑祇園の大山笠は舁山ですが、今でもフジカズラで縛って組立てます。また、京都祇園祭の山鉾の組立てでは、釘を一切使わず、わら縄でしっかりと縛ります。

昔、津江や玖珠などから日田まで「木流し」で材木を運んでいました。川に一本ずつ流すという方法でした。日田に着いた材木はで筏に組まれ、筑後川を下って、大川や佐賀などに運ばれました。この筏に組むのにカズラが用いられていました。そのため、日田にはカズラを扱う問屋がありました。日田祇園の山鉾組立て用のカズラを簡単に入手できたのです。しかし、昭和二八年（一九五三）の大水害によって、筑後川の木材水運が途絶えたため、カズラを扱う店がなくなり、カズラを簡単に入手できなくなりました。そのため、やむを得ず鉄筋の筋交いになったのです。

三、日田祇園の山鉾の歴史

（一）近世の山鉾

日田祇園祭りの山鉾の文献上での初出は、寛文五年（一六六五）の隈町組頭の長島家の「御用留記録」です。それには「山鉾木綿幕かふらん（高欄）、青杉竹にてはさみ傘鉾なし、太鼓斗り」と記されています。染矢先生は「小規模なかつぎ山であったらしい」と推測されています。高欄はついてい

ますが、杉丸太と青竹で組立てられ、幕は木綿布で作られていました。それに、日田祇園囃子が江戸から伝わる前なので、奏楽は太鼓だけでした。

森春樹（一七七一年～一八三四年）の「豊西説話」に「祇園山鉾ハ正徳四年（一七一四）隈・豆田ともに同時ニ始ル」と記されています。染矢先生は「恐らく本格的な曳山であろうが、規模や構造は不明である」と記述されています。

「淡窓日記」によれば、文政二年（一八一九）年に日田代官所（永山布政所、一七六七年から九州の幕府領を管轄する西国筋代役所となる）から「高さ三丈（約九m）を過ぐるを得ず」という指示があり、「隈之街中を行くに、豆田は則ち牛頭天王祠前に置のみ」と記されたように、隈では山鉾巡行が許されたのに、豆田ではその年の山鉾巡行を禁止されました。これは「山車（山鉾）」に轢かれて死者が出ることが続いたからです。山鉾の高さを三丈以下にするように命じたということは、それまでは九mを越す極めて丈の高い山鉾が存在したということになります。背の高い山鉾は運行時の安定性が悪く、制御しにくくなります。車輪に巻き込まれる事故だったのでしょう。代官所はそのような事故の再発を危惧したのです。

広瀬淡窓（一七八二～一八五六年）が書いた「懐旧楼筆記」によって、ようやく山鉾の具体的な姿がわかるようになります。それによると、江戸後期の豆田の鉾は四本あり、高さ三丈（約九m）で、四輪の車輪がついており、日本や中国の故事や合戦場面を「華題（テーマ）」にして、城郭・虹橋・廻廊・宮殿・山巌・瀑布などを配置して、極めて美麗だったとのことでした。また、二本の大木の長柄（棒鼻のこと）に多数の子供たちが乗って団扇であおいでいたそうです。現在の日田祇園の山鉾は「多層人形山車（だし）」に分類されていますが、その形態は江戸後期には成立していたのです。

長州戦争があった慶応二年（一八六六）には日田祇園の山鉾の巡行はできませんでしたが、明治維新以降は山鉾巡行は継続して行われるようになります。

（二）近現代の山鉾

山鉾巡行の近代史

明治一〇年（一八七七）と一九年（一八八六）には豆田地区と隈・竹田地区はそれぞれ四基の山鉾が巡行していました。当時の日田の町は「両側町」といって、通りを挟んだ両側を領域とする町組になっており、その町が山鉾の運行を担っていたのです。

「郷土読本」という本によれば、隈地区では田中町・紺屋町・中町・我有木町・横町・隈町に山鉾が一基ずつあったそうです。田中町と紺屋町が一年交代で一基、中町と我有木町も一年交替で一基出していました。それに横町と隈町が毎年一基出していました。祇園祭りに出る山鉾は四基でしたが、山鉾は六基あったのです。また竹田地区では、川原町と若宮町とに山鉾が一基ずつ計二基ありました。

豆田地区は東側を南北に走る「上町通り」に、北から「室町」「平野町」「八幡町」が並んでいました。また西側を南北に伸びる「御幸通り」は、北から「一丁目」「二丁目」「三丁目」と続きます。上町通りと御幸通りを結ぶ東西の通りは、北から「川端町」「風呂屋町」「紺屋町」「住吉町」「魚町」「田町」がありました。そして豆田の南東側には中城町、南西側には港町がありました。

豆田地区の祇園祭りでは四基の山鉾を出していました。上町は二基出していましたが、ひとつは室町・平野町・八幡町が一年交代で出す一基で、もうひとつは下町一丁目・同二丁目・三丁目が一年交代で出す一基でした。それに中城南組と同北組が交互に出す一基と、毎年出す田町の一基の計四基でした。豆田には九基の山鉾があったのです。

明治期、日田の祇園祭りの山鉾は、隈地区に六基、竹田地区に二基、豆田地区に九基、計一七基の山鉾があったのです。

「八坂神社奉納山鉾記并ニ諸費用共」という文書によれば、明治一七（一八八四）年の隈地区の田中町と紺屋町の山鉾の高さは二丈五尺（約七・五m）でしたが、竹田地区の山鉾が三丈（約九m）の高さにしたので、隈地区も三丈にしたと記されています。

水害と山鉾

明治二二年（一八八九）、日田は大水害に襲われます。文政二年の水害よりも大きな被害を受けたので、隈・竹田地区も豆田地区もその年の祇園祭りを休止せざるを得ませんでした。日田の市街地は水害を受けやすい所です。周囲の山々から川が集中的に流れ込んでくるからです。

洪水と火事で幕類や山鉾の部材を流失したり、濡れたり、焼失することが度々生じました。そのため、昔は見送幕や水引幕などを商家の土蔵の二階などに預けていたそうです。

明治二二年以降も、大正一〇年（一九二一）の洪水があり、昭和二八年（一九五三）西日本水害では三隈川が氾濫し、未曾有の被害を受けています。最近では平成二四年（二〇一二）に花月川が氾濫して豆田地区が浸水しています。

洪水対策の治水と発電を目的にした松原ダムが昭和四八年（一九七三）に完成し、三隈川添いの隈・川原地区の浸水の危険性は減少しましたが、日田市内の水害がなくなったわけではありません。

電線敷設と山鉾

明治三四年（一九〇一）、日田水力電気会社が配電を始め、電柱と電線によって山鉾の巡行ができなくなります。そのため、隈・竹田地区でも豆田地区でも、各町は飾り山を作るようになります。しかし、隈地区横町では明治四五年（一九一二）に山鉾の台車を新造し、大正三年（一九一四）には田中町と紺屋町も新調して、山鉾の高さを低くして巡行を再開しました。

隈地区紺屋町上組の「山鉾諸時記」によれば、大正一三年（一九二四）に、紺屋町上組・我有木町下組・河原町中組が山元になって、それぞれ山鉾を建造しています。山鉾の巡行順も新たに決められ、一日目は川原町の山鉾が隈の八坂神社に来て、隈八坂神社の神輿が河原町の若宮社に神幸し、紺屋町・我有木町・川原町の順で巡行します。そして、隈八坂神社の神輿の還幸時には神幸時と同じ順番で山鉾が随伴し、最後に自町に戻ります。二日目は我有木町と紺屋町の山鉾が川原町の若宮社に行き、若宮社の神輿が隈八幡神社に神幸する際は、我有木町・紺屋町・川原町の順で山鉾が随行しました。還幸時には逆に川原町・我有木町・紺屋町の順で巡行し、川原町の山鉾は若宮社に戻り、我有木町と紺屋町の山鉾は自町に帰りました。隈地区の隈八坂神社と川原地区の若宮社の祇園祭りが統合されたのです。

昭和一六年（一九四一）一二月八日に太平洋戦争が始まり、翌年に隈町が合同で山鉾一基を建造しましたが、竹田地区と豆田地区は休止、昭和一八年から日田の祇園祭りのすべての山鉾巡行が休止することになりました。

山鉾模型からの推測

日田祇園山鉾会館の一階で展示されている山鉾模型は明治三七年（一九〇四）頃に作られたものと伝えられ、縮尺が五分の一だといわれています。どうも、電線敷設で山鉾巡行が不可能になったので、それまで建造していた背の高い山鉾の姿を残そうとして製作したものらしいのです。山鉾模型は全高が三・八mほどあり、五倍すると、全高一九mの山鉾が建造されていたことになります。現在の平成山鉾の倍近い高さです。このことから、明治三〇年頃は日田の山鉾の巨大化のピークだったのではないかと推測され

るのです。

(三)戦後の山鉾復活

敗戦直後は食料や物資の不足のため、神輿洗いだけが行われていました。敗戦後しばらく経つと、祭りの担い手である青年たちが復員してきました。そして、経済復興によって山鉾巡行が次第に復活していきます。

隈・竹田の山鉾の休止と復活

まず、隈・竹田地区の戦後の復活状況を見ていきましょう。川原町を例にして、戦後の山鉾の復活と巡行の再興の様子を見ていきます。川原町には山鉾の古い板絵が残されています。表に「奉納「山鉾図」川原町志茂組」と記され、裏に「文政四年辛巳六月吉日　紙屋市五郎書之」と墨書があり、文政四年(一八二一)には川原町下組が山鉾を所有していたことがわかります。明治期の電線敷設によって、山鉾の巡行が阻害され、飾山に変更されましたが、山鉾の全高を低くすることによって巡行が復活します。戦時中の休止から、戦後しばらくして再開しましたが、昭和二八年六月の西日本水害では、日田市内は濁流に呑み込まれ、三隈川添いの隈・竹田地区は大きな被害を受け、日田の祇園祭りも多大な影響を受けてしまいました。それでも翌年には山鉾巡行を再開し、三隈町一丁目、大和町二丁目西組、大和町三丁目上組・川原町が山鉾を建造しています。山鉾巡行がこの頃には復旧していたことは間違いありません。それから毎年山鉾が建造され、巡行に参加していました。

昭和三一年(一九五六)の背の低い川原町の山鉾の写真が残されています。昭和三五年(一九六〇)年には川原町川上組が高さ一〇mを越す飾山を建造しました。昭和三八年(一九六三)年には山鉾小屋が倒壊し、数人の負傷者が出たため、川原町ではせっかく建造した山鉾の巡行を中止することになりました。このように紆余曲折がありながらも、祇園祭の山鉾巡行は次第に盛んになっていきます。昭和四〇年(一九六五)年には川原町商店会二日市会が夜間巡行用の提灯山を製作しました。しかし、昭和四三(一九六八)年に、若宮神社にあった山鉾の部材を保管していた倉庫が焼失してしまいました。そのような逆境の中、昭和四七年(一九七二)年に川原町は山鉾を復活させます。隈町の古い台車の一部を借り受け、それに焼け残った部材を組み合わせて山鉾を組立て、福岡県吉井町から人形を借用しての復活でした。

昭和四九年(一九七四)には川原町の祇園山鉾協賛会が発足し、上組・中組・下組が統合されます。昭和五〇年(一九七五)年、豆田地区の上町から旧室町所用の山鉾の台車を譲り受けて、本格的に祇園山鉾を復活することができました。ただ、豆田から譲られた山鉾は大型で、電線に接触しない五・五mの高さにするために台車の柱を切り縮めました。また、前後の芯棒の間隔が広いため、直径の小さな車輪しか取り付けられず、動きが鈍くなりました。バランスの悪い構造の山鉾でした。昭和五三年(一九七八)年には山鉾納め小屋を新築します。平成六年(一九九四)に電線の高架化工事が完了し、山鉾の全高を八・五mに高めましたが、引き廻すと、四本柱や高欄下部、貫に亀裂が入り、横板も徐々に捻れてしまいました。運行上の危険性を考慮して、平成二一年(二〇〇九)に山鉾の復元新調が行われ、新しい山鉾になりました。

三隈町(旧田中町と旧紺屋町が合併)が昭和三〇年(一九五五)から山鉾巡行を休止しました。その年は大和町一丁目の山鉾が建造されただけでした。

昭和三七年(一九六二)に大和一丁目(我有木町・銀天街)にアーケードができたため、隈地区では巡行路の変更や飾山への改変を余儀なくされました。また、ネオンサインの設置によって、山鉾の全高を低くしなければな

りませんでした。三隈町では昭和四〇年（一九六五）に子供用の山鉾に縮小して巡行するようになり、昭和四四年（一九六九）に吉井町の人形を借りて山鉾を建造しますが、巡行しませんでした。その後、本格的な山鉾として復活します。三隈町では山鉾を少しでも高くしようと、平成五年（一九九三）に四本柱を昇降式に変更しました。

写真 13：全高が低かった頃の山鉾

大和町では旧我有木町（大和町一丁目）・旧横山町（同二丁目）・旧中町（同三丁目）がそれぞれ山鉾を所持し、交代で山鉾を運行していました。しかし、道路事情の悪化が原因で、昭和三〇年（一九五五）から三五年（一九六〇）にかけて山鉾巡行を休止し、その間、飾り山を作っていました。昭和三六年（一九六一）、最も新しかった旧我有木町の山鉾を大和町の山鉾として運用することにして、高さを低くして山鉾巡行を再開します。そして、山鉾自体の全体バランスが悪く、台車の横木のねじれや各部材の傷みが目立つようになったので、平成二三年（二〇一一）に全高一〇mの山鉾を復元新調しました。

若宮町の古い台車の柱材に「元治元年（一八六四）」の墨書があるそうです。山鉾巡行は昭和一二年の人身事故を契機に一旦途絶えます。昭和二八年の水害で、水引幕が濡れて傷んでしまいました。しかし、昭和五四年（一九七九）に豆田地区上町の台車（室町と平野町共有の台車）を譲り受けて復活し、平成六年（一九九六）に四本柱を昇降式に改造して、一・八m伸縮できるようにしました。そして平成二五年（二〇一三）に山鉾の車台を復元新調します。

日田祇園山鉾連合会の結成

昭和四六年（一九七一）、「日田祇園山鉾連合会」が結成されました。会則第三条に掲げられた「日田祇園山鉾の伝統保存、及び卓越した無形文化財を紹介、宣伝する」ことを目的としていました。

当初は隈・竹田地区の山鉾町が加盟していただけでした。なぜなら、当時は豆田地区では山鉾が復活していなかったからです。そして、山鉾を復活した豆田地区の町々が次々に加盟していきます。

平成一八年（二〇〇六）、日田祇園山鉾保存修理委員会が設立され、国指定重要無形民俗文化財に用いられる用具等の修理・新調が国庫補助で実施できるようになりました。その会長には山鉾連合会の会長をされていた後藤稔夫さんが就任されました。私は後藤稔夫さんには長年御世話になりました。日田祇園の聞き取り調査では非常に参考になるお話をして頂いたこともあります。日田祇園山鉾保存委員会の会長として委員会を指揮され、委員の私も後藤さんの許でいろいろ発言させて頂きました。九九歳まで二九年間連合会の会長をされたのは驚くべきことでした。令和七年（二〇二五）一〇月に一〇三歳で亡くなられましたが、後藤さんの日田祇園に与えた業績はとても大きなものだったといえます。

日田祇園会館の開館

昭和六三年（一九八八）七月、隈八坂神社の北側に市立の日田祇園会

館が開館します。これは、隈・竹田地区の山鉾を収蔵して展示する施設でした。隈・竹田地区の山鉾を巡行時の姿で展示できる施設ですが、山鉾の搬入口の高さは六mしかありません。そのままでは搬入搬出は無理なので、そのため、山鉾の四本柱をチェーンブロックを用いた伸縮式にしたり、継ぎ足し型にする必要がありました。

写真 14:日田祇園会館

平成山鉾の新造

平成元年（一九八九）、若宮町の山鉾が福岡よかトピアに出場しました。これを契機に「十メートル山鉾」建造の気運が高まり、「隈町十メートル山鉾を造る会」を結成し、翌平成二年に「平成山鉾」を完成させ、隈・竹田地区の山鉾巡行に参加しました。平成六年（一九九四）には平成山鉾が「京都遷都一二〇〇年祭」の祇園山鉾巡行に出場しています。この平成山鉾は特定の町の所有ではなく、隈地区の有志によって建造・運営されるという珍しい山鉾です。この平成山鉾の登場によって、隈・竹田地区の電線の高架工事が日田市の支援によって実施されます。平成二年から工事に着手し、平成四年に隈町、平成五年に川原町、平成六年に若宮町で完工します。そのおかげで、隈・竹田地区の高さ五mちょっとだった山鉾は高くなり、全高が八mから一〇mになりました。

写真 15:平成山鉾

豆田の山鉾の休止と復活

豆田地区では、戦後に復活していた山鉾巡行は昭和三〇（一九五五）年代に次々に休止してしまいます。

中城町では昭和三二年（一九五七）を最後に山鉾巡行を休止しました。もともと中城町と春日町は一年交替で山鉾を出していました。中城町は春日町と統合したために台車が二台あり、休止中は神社の床下で保管していたそうです。

豆田上町では昭和二三年（一九四八）に山鉾巡行が復活しましたが、山鉾同志の衝突で負傷者が出て、昭和三〇年（一九五五）頃に休止してしまいます。

豆田地区では山鉾巡行の復活が遅れます。豆田は日田から中津へ向かう主要道路の一部となり、南北を通る狭い道をバスやトラックが走り、次第に多数の自動車が通り抜ける事態になっていたのです。一九六〇年代（昭和三五年～）から急激に進んだモータリーゼーションによって交通量は飛躍的に多くなり、歩道もない狭い道は歩行者が安全に歩けなくなりました。自動車の通行と山鉾巡行は共存できなかったのです。そのような状況の中、昭和五九年（一九八四）には日田市は「豆田地区町並み保存事業地区」に指定して低利な融資事業を始めます。そして、昭和六二年（一九八七）玉川バイパスが開通することによって、自動車は豆田地区を迂回するようになって、南北を貫く二本の道の交通量が激減します。これを契機に豆田の山鉾が次々に復活します。

・昭和六一年（一九八六）中城町の山鉾が三〇年ぶりに高さ可変式で復活。令和元年（二〇一九）には山鉾の車台を復元新調しました。

・昭和六二年（一九八七）港町の山鉾が高さ可変式で復活。

・平成元年（一九八九）下町の山鉾復活。平成三〇年には高さ可変式で復元新調しました。

・平成二年（一九九〇）上町の山鉾が復活。八幡町の古い台車を用いて山鉾を組立てました。

そして、昭和六三年（一九八八）には豆田地区に天領日田資料館が開館し、平成一六年（二〇〇四）には豆田地区は国の伝統的建造物群保存地区に選定されます。それによって豆田地区の上町通りと御幸通りは、電線の地下埋設工事が行われました。

豆田町は横道などで電線埋設されなかった所があるため、全高六mから八mの高さで留まっている山鉾が多いのです。

国重要無形民俗文化財とユネスコの無形文化遺産

平成八年（一九九六）一二月に「日田祇園の曳山行事」として「国重要無形民俗文化財」に指定されます。この時、私は文化庁伝統文化課民俗文化財部門の文化財調査官で、日田祇園の指定の担当でした。幸運にも県指定と国指定の両方に関わることができたのです。そして、平成二八（二〇一六）年には全国の「山・鉾・屋台行事」のひとつとしてユネスコの「無形文化遺産」として「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載されました。それは日田祇園が国指定無形民俗文化財に指定されていたからです。それは日田祇園を復活させ、守ってきた地元の人たちの熱意が、誇りある国指定と無形遺産を勝ち取ったのです。

写真 16:「山・鉾・屋台行事」無形文化遺産登録祝賀会での日田祇園

新コロナ禍による休止

令和二年から四年までの三年間は、新コロナ禍が原因で、山鉾巡行をやむなく中止せざるを得ませんでしたが、令和五年（二〇二三）には四年ぶりに山鉾巡行ができました。

四、日田祇園の懸装品

（一）見送幕と水引幕、それに町旗

山鉾・屋台の懸装品とは、布製の幕や金属製の懸け飾りをいいます。日田祇園では金属製の懸け飾りはありませんので、布製の幕類ということになります。日田祇園の山鉾の場合、「見送幕」と「水引幕」、それに「町旗」があります。見送幕は「ミオクリ」と呼ばれ、山鉾の背後に高々と掲げた長方形の幕のことです。去っていく山鉾を人々は見送る時、山鉾の背後に下げた見送幕はとても目立って印象に残るものです。水引幕は「ミツチキ」と地元で呼ばれています。車台の胴部四周を囲う横に細長い幕で、刺繍のレイアウトが難しい幕です。町旗は町名の文字などを刺繍した小型の幟で、二本で一組になっています。日田祇園の幕は緋羅紗に刺繍をしたものが基本です。神紋を白く染め抜いた紺染めの木綿布の水引幕がありますが、天気の悪くなった時や日田祇園会館での展示収蔵中に懸けるだけです。また、赤く染めた木綿の水引幕もあります。

見送幕や水引幕、町旗はすべて乳（チチ）で懸垂します。幕の上面や側面に輪になるように作られた布片です。幕の乳は犬の乳が並んでいる様子に似ているからついた名称だそうです、チチと呼ばれますが、乳掛け旗（チカケバタ）という言葉があるので、チとも呼んでいたと思われます。ここに綱や棒を通して吊るすのです。力がかかるので、白木綿や黒く染めた木綿布などが用いられます。復元新調の時、丈夫にするため、芯を入れた羅紗を用いて製作することもあります。幕に縫い付ける部分に「護符飾り」を縫います。四角い枠と筋交いのようなバッテンを木綿糸で縫ったもので、お守りのような役割をもっています。

山鉾の背後に見送棒（細い杉丸太）を二本立てて見送幕を懸垂します。見送棒の最上部に滑車をつけて綱を通し、見送幕の上げ下げの時に用います。綱には「破風板（はふいた）」あるいは「門板（もんいた）」という見送幕を下げる横長の板を取り付けます。その下の棒に見送幕上部の乳を通して見送幕を下げるのです。わかりやすいので、日田祇園山鉾会館で展示されている川原町の「素盞嗚尊大蛇退治図」の古い見送幕を見てみましょう。見送幕の上に破風屋根の妻部分のような黒い板があります。これが破風板です。見送幕の裾を縄で引っ張って拡げていました。これでは幕が損傷するので、復元新調では、幕の最下部の裏に棒袋という筒状の布を縫い付けて竹や丸棒を通し、その両端を綱で山鉾に固縛するようにしました。

写真 17：川原町の破風板と見送幕
「素盞嗚尊大蛇退治図」1867 年

町旗には神紋や町名を刺繍しますが、中には緋羅紗地のままの無地のものもあります。上部と側面の乳に逆L字型の竿を通して掲げます。

見送幕や水引幕、それに町旗にふたつの神紋が刺繍されています。これは「五瓜に唐花」「左三つ巴」と呼ばれる紋で、京都八坂神社の神紋と同じです。

(二)江戸時代の幕

製作年のわかる幕

記録によって製作時期が判明する幕類があります。近世は紙に書かれた文書より、幕類の収納箱に記された記録の方が良く残っているようです。まず、近世の作品であることが明確な幕類を古いものから紹介してみましょう。

①天保七年(一八三六)下町(旧三丁目)見送幕「鳳凰図」
②天保七年(一八三六)下町(旧三丁目)水引幕「龍魚図(鯱図)」
③天保一一年(一八四〇)上町(旧室町)見送幕「旭出世鯉図」
④嘉永二年(一八四九)中城町(旧上中城)見送幕「神紋と玄武図」
⑤嘉永二年(一八四九)下町(旧三丁目)水引幕「龍図」
⑥安政二年(一八五五)下町(旧一・二丁目)見送幕「虎図」
⑦安政六年(一八五九)上町(旧平野町)見送幕「雲龍図」
⑧元治元年(一八六五)上町(旧平野町)水引幕「玄武図」

写真 18:豆田下町の見送幕
「鳳凰図」1836 年

写真 19:豆田下町の見送幕
「鳳凰図」2015 年の新幕

写真 20:豆田上町の見送幕
「旭出世鯉」1840 年

写真 21：中城町の見送幕

「神紋と玄武図」1849 年

写真 22：豆田下町の見送幕

「虎図」1855 年

これらの幕の特徴は、刺繍部分の盛り上がりが小さく、比較的平面的なことです。そして、金糸が極めて高品質で、一五〇年以上経っているのに、ほとんど変色してません。

その他、作風などから近世の幕類と推測されたものがあります。隈・川原地区若宮町の見送幕「獅子図」は洪水で水損しています。文政末期から天保初期の作品と判定されていますが、刺繍の肉が結構入っており、立体化していることから、明治期の作品とも考えられます。そのため、より一層の検討が必要だと思われます。

なお、三隈町は大正一〇年（一九二一）の洪水で幕を流失しています。

上町（旧室町）の町旗は天保一一年の見送幕「旭出世鯉」と同じ羅紗を用いているので、同時に作られたものと考えられます。

豆田中城町旧上中城の水引幕「牡丹に唐獅子図」も、同町の嘉永二年頃に製作された見送幕「玄武図」とほぼ同時期のもので、長崎刺繍ではないかと推測されます。

豆田上町旧八幡町の水引幕「龍図（双龍波濤図）」と緋羅紗無地の「小旗」二旗は、最近拝見したのですが、江戸後期に同時に製作されたものと考えられます。これは作風が上方とは違うので、長崎刺繍だと考えられます。

製作者が明確にわかる幕があります。⑤の水引幕「龍図」は京都の三文字屋伊助に発注したものです。もしかすると製作者かもしれません。⑦の見送幕「雲龍図」は長崎の縫屋米助が作者です。縫屋という屋号ですので、間違いなく繍師（ぬいし）だと考えられます。日田では江戸時代には京都と長崎に刺繍を主に発注していたものと思われます。

天保七年（一八三六）の豆田下町（旧豆田町三丁目）の見送幕「鳳凰」と水引幕「龍魚図（鯱図）」は、製作年がわかる日田祇園の幕の中で最古のものです。金糸の質は高く、平面的な刺繍です。見送幕の木箱の蓋裏に「祇園山鉾見送一懸天保七年丙申　林鐘元吉新作之」と記されています。この幕を製作した林鐘元吉はどこの人かわかりません。林鐘とは中

写真 23：豆田上町（旧八幡町）水引幕「龍図（双龍波濤図）」江戸後期

国古代の音階である「十二律」の一つで、旧暦六月のことです。林鐘元吉は長崎の中国系の繍師の可能性があると思います。

豆田上町の見送幕

四角く囲った文書は、豆田上町の旧平野町に伝わってきた見送幕「龍図（雲龍波濤図）」を収納していた木箱の蓋裏の墨書で、安政六年（一八五九）に書かれたものです。羅紗の色を「猩々緋」と表現しています。

猩々緋　寛永八甲辰年求之　年々用
□こく□旧物色鮮明也
安政六己未用其旧物繍之
補助　酢屋佐左衛門
伊予屋儀七
肥前国長嵜木下志賀介周旋
同　縫屋米助繍之
金九両壱分　寛永八年　元猩々緋料
金弐拾両　安政六年新縫料
金弐両　長崎往還諸雑費及図写筆等
金弐朱弐歩　箱及裏木綿費
時宜安政六年己未六月吉日
平野町

この記録によれば、「平野町では寛永八年（一六三一）に購入した猩々緋の無地の羅紗地を毎年（日田祇園祭りの山鉾の見送幕として）使ってきました。しかし、古いものであるにも関わらず、色鮮やかなので、この古い緋羅紗を用いて「雲龍」の刺繍を施しました」というのです。しかし、寛永八年の干支は辛未（かのとひつじ）で、甲辰（きのえたつ）ではありません。江戸時代の甲辰の年を調べてみると、慶長九年（一六〇四）・寛文四年（一六六四）・享保九年（一七二四）・天明四年（一七八四）・天保一五年（一八四四）が甲辰の年でした。もしかすると、寛文四年に猩々緋を購入したのかも知れません。寛永八年から安政六年までは二三五年間あり、寛文四年からでも一九五年経過しています。この刺繍が作成された安政六年から現在まで一六七年経っています。どちらにしても、とても長い歳月を経ていることは間違いありません。

この見送幕の裏地の木綿布は大判の更紗です。現在は褪色していますが、赤や緑色などの染料を用いた唐草文様で、蔓についた花と葉の図柄で埋まっています。これも長崎を通じて輸入されたものでしょう。羅紗も更紗も遠い異国から船に載せられ、海をはるばると渡ってきて、日田の地に根付き、大切に使われて守られてきたのです。

記録の後半は費用につい記しています。緋羅紗の代金は九両一分、刺繍の縫い賃が二〇両、長崎への往復旅費と運搬費、下図代等の他の雑費が二両、収納用の木箱代と緋羅紗の裏地に用いた木綿代が二朱二歩です。合計三一両二朱三歩になります。

一両は現代の一三万円に相当するといわれています。今とは生活も違いますし、物資の豊かさも比べものになりませんが、見送幕はかなり高価なものだったことがわかります。

この雲龍の刺繍をしたのが、長崎の縫屋米助だったことに注目せずにはいられません。この見送幕「雲龍図」は長崎で作られていたのです。

長崎刺繍

長崎刺繍は唐船の来航が増えた寛永年間（一六二四～四四）から唐人屋敷ができる元禄二年（一六八九）まで、長崎の町中に居住していた「住宅唐人」たちによって伝えられた刺繍技術が長崎に定着したものといわれています。住宅唐人の多くが福建省出身であることから、その地方の技術が

伝来したと考えられています。また、一説では貞享年間（一六八四～八八）に伝来したとも言われています。中国刺繍は宋（九六〇～一一二七）の首都開封で発達し、南宋（一一二七～一二七九年）の首都臨安（現杭州市）で成熟したそうです。

明治二六年（一八九三）の『長崎地名考』の物産部に「当時は専ら婦女の工業なりしが其後、在勤奉行より江府（江戸）進献の事ありしに、後には年々調進の事となり本邑の職工命をうけてしたてしなり。夫（それ）より此職に就くもの多くなれり」と記されています。幕府への献上が毎年行われるようになって盛んになったというのです。なお、長崎くんちの傘鉾の垂れや衣裳の刺繍は長崎刺繍で製作されていました。

長崎が開港して外国船の寄港が増えると、幕末から明治初年には花鳥や軍艦など、外人好みの図案の刺繍が飛ぶように売れたそうです。しかし、それも次第に衰退し、大正末期から昭和初期には、図案の輪郭に金糸を用いる程度となり、それも姿を次第に消していきました。長崎の刺繍は長崎くんちの垂れ（幕）の修理や着物の縫い紋などでかろうじて命脈を保っていたのです。

長崎刺繍の特徴は、金糸も用いますが、色糸を多用することにあります。まず、色糸を縒（よ）ってさまざまな太さの糸を作って質感を変化させること、次に色糸を着色して繊細なグラデーションを施すこともあること、そして刺繍の下に紙縒（こより）などを入れて少しだけ立体感を出すことなどです。まさに絵画のような刺繍であるといえます。

現在、長崎刺繍の伝承として、嘉勢照太氏（長崎県指定の無形文化財保持者）がおられ、長崎刺繍工房を主宰されています。私は平成二一年（二〇〇九）に工房をお尋ねしてお話を伺ったことがあります。嘉勢氏は衰退しかけた長崎刺繍の技術を復活再生してこられました。伝統的な技法を学ぶと共に、江戸時代の作品をもとに、その類い希な繊細な技と観察力、それに美術的センスによって、途絶えていた技法を復活させたのです。大黒町の「唐人船飾り船頭衣裳」を制作されたり、東古川町の「川船飾り船頭衣裳」の復元、榎津町の「川船飾り船頭衣裳」のデザインと新調制作などを手がけ、船大工町の「川船飾り船頭衣裳」も制作されていました。ちょうど、万屋町の傘鉾垂れ「魚尽くし」の復元制作を一〇年計画で実施されていたこともあり、その作品などを拝見することができました。また、長崎刺繍の技を用いて現代アートにも挑戦しておられ、平成一四年（二〇〇二）からは長崎刺繍再発見塾を立ち上げ、後継者育成も行っておられます。

日田と長崎

江戸時代の長崎刺繍の大作が日田に残されていますが、長崎くんち以外で、長崎刺繍の幕がある祭礼は他にないと思います。

なぜ、長崎刺繍が日田にもたらされたのでしょうか。その理由のひとつは、日田と長崎はともに幕府領で、代官所や奉行所があったことです。日田の永山布政所（日田代官所）は九州の幕府領を管轄する役割を担っていましたし、掛屋によって日田は九州における金融の中心地でもありました。また、長崎は鎖国していた日本で唯一の海外に開かれた港町で、長崎奉行所は長崎の町の行政と貿易統制、長崎警固、切支丹禁圧などを職務としていました。また、長崎代官所は長崎とその周辺の天領を支配していました。そのため、日田と長崎は深く結びつき、経済的にも文化的にも盛んに交流していたのです。当時、大きな幕に金糸などで刺繍できたのは京都と長崎でした。長崎は京都よりも近くて交流も盛んでした。そのため、江戸時代の日田の見送幕や水引幕には、長崎で製作されたものが多かったのでしょう。

(三)近現代の幕

明治時代の幕

日田祇園の幕が盛んに製作された時期は近世後期と明治時代、それに現代です。それでは、明治期に製作された幕類を古いものから紹介してみましょう。

①明治二年(一八六九)大和町三丁目(隈中町・下横町)見送幕「麒麟図」
②明治二年(一八六九)同上(隈中町・下横町)水引幕「唐獅子図」
③明治二〇年(一八六七)川原町見送幕「素戔嗚尊大蛇退治図」
④明治二一年(一八八八)豆田上町(旧八幡町)見送幕「鷲図」
⑤明治二三年(一八九〇)川原町水引幕「龍虎図」
⑥明治二五年(一八九二)大和町二丁目(上横町)見送幕「岩に虎図」
⑦明治二五年(一八九二)中城町「旧春日町」水引幕「鯉図」
⑧明治二七年(一八九四)港町(旧田町)見送幕「牡丹に唐獅子図」
⑨明治三〇年(一八九七)豆田上町(旧室町)水引幕「龍(双龍波濤)図」
⑩明治三九年(一九〇六) 大和町三丁目見送幕「麒麟図」
⑪明治四五年(一九一二)大和町一丁目(我有木町)見送幕「鷲図」
⑫明治四五年(一九一二)大和町一丁目(我有木町)水引幕「注連縄図」

写真 24:大和町三丁目(隈中町・下横町)見送幕「麒麟図」1869 年

写真 25:豆田上町(旧八幡町)見送幕「鷲図」1888 年

写真 26:大和町二丁目(上横町)見送幕「岩に虎図」1892 年

写真 27:港町(旧田町)見送幕「牡丹に唐獅子図」1894 年

写真 28：大和町三丁目見送幕

「麒麟図」1906 年

写真 29：大和町一丁目(我有木町)

見送幕「鷲図」1912 年

これらの明治時代に製作された見送幕や水引幕の刺繍の特徴は、刺繍の下に木綿の綿が詰められて、より一層盛り上げられて立体化したことです。写実的な作風は、優れた刺繍技術に支えられていたのです。

江戸時代の平面的な幕と見比べると、立体的な刺繍は迫力があるので、優れた作品だと考えたのでしょう。刺繍を修理する時にも、刺繍の下に綿や鋸屑を大量に入れて、極端にふくらませてしまったのです。製作地である大阪に送って修理するのではなく、地元の日田での修理でした。専門的な繍師が修理するほど上手ではありません。そのため、盛り上げ過ぎてしまいました。そうすると、無理に立体的にした龍や鯉は痩せ細ります。原型の形を失ったのです。また、刺繍部分が厚みを増して重くなりますから、幕がまっすぐに垂れずに折れ曲がり、それだけ幕は早く損傷するようになります。

明治期の幕類のもうひとつの問題は、羅紗地の染料や金糸の質が低下し、酸化や紫外線などによって変色・褪色していることです。実際、幕の経年劣化が目立つのです。

戦後に製作された幕

三隈町は見送幕と水引幕を町内の土蔵に預けて保管していましたが、大正一〇年（一九二一）の水害で流されてしまったと伝えています。そのため、昭和六〇年（一九八五）に「龍図」の見送り幕、と鳳凰」の水引幕、それに町旗を京都の川島織物セルコンに発注して新調しています。

川原町では平成八年（一九九六）には見送幕「素戔嗚尊大蛇退治図」を新調し、平成二一年（二〇〇九）には車台を復元新調しました。

中城町の見送り幕の「玄武」は平成二八年（二〇一六）に復元新調しています。

上町には三枚の見送り幕があり、旧室町の「鯉の滝登り図」、旧平野町の「雲龍図」、旧八幡町の「鷲図」を一年ごとに交代して用いています。なお、旧八幡町には神紋だけを刺繍した緋羅紗地の見送幕がありますが、使用していません。

港町では平成二二年（二〇一〇）に見送り幕「牡丹に唐獅子」を復元新調しました。

豆田下町は平成二七（二〇一五）年に見送り幕「鳳凰」を復元新調しています。

表「日田祇園 懸装品一覧」には製作時期や作者がわからないものがありますが、その多くは明治期のものと推測されます。今後の史料の発見と

研究に待ちたいと思います。

日田祇園 懸装品一覧表 2026.01

	山鉾町（旧町名）		種　別	画　題	製作時期・製作者	復元新調
隈・川地区	大和町	大和町一丁目（我有木町）	見送幕	鷲図	明治45年（1912）・原画は可翁 大阪市高麗橋八百屋町の桔梗屋 吉井藤七	
			水引幕	注連縄図	明治45年（1912）・原画は祖仙 大阪市高麗橋八百屋町の桔梗屋 吉井藤七	
		大和町二丁目（上横町）	見送幕	岩に虎図（巌上の虎図）	明治25年（1892）・原画は祖仙 大阪市高麗橋一丁目の桔梗屋 吉井藤七	2008.03
			水引幕	双龍図	不明	2008.03
			町旗	町名文字と神紋２旗	不明	
		大和町三丁目※	見送幕	麒麟図	明治２年（1869） 作者不明	
			水引幕	唐獅子図	明治２年（1869） 三井納（三井呉服店か？）	
	三隈町		見送幕	龍図	昭和60年（1985） 川島織物セルコン製	
			水引幕	鳳凰図	昭和60年（1985） 川島織物セルコン製	
			町旗	町名文字	昭和60年（1985） 川島織物セルコン製	
	川原町		見送幕	素戔嗚尊大蛇退治図	明治20年（1887・旧幕）	
			見送幕	素戔嗚尊大蛇退治図	平成８年（新幕）	
			水引幕	龍図	明治23年（1890）	
			水引幕	龍虎図	明治25年（1892）	2012.03
			町旗	神紋と町名文字	不明	2012.03
	若宮町		見送幕	獅子図（水損旧幕）	文政末期から天保初期か？	
			見送幕	獅子図（新幕）	昭和59年（1984） 愛媛県新居浜市郷東楠町 藤野正千代旗店	
			水引幕	龍図	昭和63年（1988） 愛媛県新居浜市郷東楠町 藤野正千代旗店	
			町旗	町名文字	不明	
豆田区	上　町	旧室町	見送幕	旭出世鯉図	天保11年（1840）・製作者不明 （吉井藤七が明治30年に修理）	
			水引幕	龍図（波濤双龍図）	明治30年（1897） 大阪府高麗橋壱丁目 吉井藤七	
			町旗	神紋と町名文字２旗	天保11年（1840）か？・製作者不明 （吉井藤七が明治30年に修理）	
		旧平野町	見送幕	雲龍図	安政６年（1859）・肥前国長崎 縫屋米助	
			水引幕	玄武図	元治元年（1865）	
			町旗	神紋と町名文字	不明	
		旧八幡町	見送幕	鷲図	明治21年（1888） 大阪府高麗橋壱丁目 吉井藤七 下絵は崎陽（長崎）の画師 木下逸雲	
			見送幕	神紋	不明	
			水引幕	龍図（波濤双龍図）	江戸後期・長崎で製作された可能性大	
			小旗	緋羅紗無地　２旗	江戸後期	
			町旗	紋と町名文字　２旗	不明（大正期か？）	
	下　町	旧豆田町1･2丁目	見送幕	虎図	安政２年（1855）・製作者不明 下絵は隈町の画師亀州・木下逸雲補筆	
			水引幕	龍魚図（鯱図）	天保７年（1836）	
			水引幕	緋羅紗無地	不明	
		旧豆田町３丁目	見送幕	鳳凰図	天保７年（1836） 林鐘元吉新作之・長崎？	2015.03
			水引幕	龍図	嘉永２年（1849）・京都の三文字屋伊助 下絵は隈町の亀州	
	中城町	旧春日町	見送幕	神紋（左三巴・木瓜）	不明	
			水引幕	鯉図	明治25年（1892）	
		旧上中城（上中町）	見送幕	神紋と玄武図	嘉永２年（1849）　・長崎の縫屋伊三か？	2016.03
			水引幕	牡丹に唐獅子図	嘉永２年（1849）頃・長崎の縫屋伊三か？	
	港　町（田町）		見送幕	牡丹に唐獅子図	明治27年（1894） 大阪市東区高麗橋ノ壱　吉井藤七	2010.03
			水引幕	神紋と宝珠図	不明	2010.03
			町旗	神紋・町名文字	不明	
			町旗	神紋	不明	

※（隈中町・下横町）

(四)原画と下絵の作者

いずれの見送幕も水引幕も金糸を中心とした刺繍が施されていますが、その図柄を刺繍するには原画や下絵が必要になります。下絵は幕と同じ大きさに作成された線描の絵です。原図や下絵の作者が記録でわかる場合もあり、実際に原画や下絵が残っていることもあります。

安政二年(一八五五)の豆田下町(旧豆田町一・二丁目)の見送幕「虎図」は、下図を隈町の絵師亀州で、長崎の南画家である木下逸雲(一八〇〇~一八六六)が補筆したそうです。逸雲は鉄翁祖門・三浦梧門と共に長崎三大家とされた絵師でした。刺繍の繍師はわかりませんが、逸雲が下図に補筆していることから、長崎の繍師かも知れません。

嘉永二年(一八四九)の豆田下町(旧豆田三丁目)の水引幕「龍図」は隈町の亀州が下絵を描いていますが、こちらは京都の三文字屋伊助が製作者、あるいは仲介者と考えられます。

明治二五年(一八九二)製作の隈地区大和町(二丁目・旧横町)の見送幕「岩に虎図」と、明治四五年(一九一二)の大和町(一丁目・旧我有木町)の水引幕「注連縄図」は祖仙の原画を用いています。森祖仙(一七四七~一八二一)は大坂の絵師で狩野派や円山応挙などから影響を受け、主に動物画を描いています。通称は八兵衛といい、守象が名で、祖仙は号です。見送幕の木箱の蓋裏に「守象祖仙筆　後藤方大模　繍師大阪高麗橋二丁目　吉井藤七　上横町什物」と墨書きがあります。森祖仙の模写絵を購入して水引幕が製作されたのです。大和町には原画となった虎図が残されています。

また、明治四五年(一九一二)の大和町一丁目の見送幕「鷲図」は可翁の絵を原画として用いたとされています。可翁は一四世紀の前期から中期頃に活躍したという画人で,日本の初期水墨画を代表する存在です。しかし、その実体は不明で、臨済宗の禅僧可翁宗然だという説や詫磨派の絵師だとする説などがあります。見送幕の木箱の蓋裏に「見送之原図ハ石井樋口安治所蔵ノ画、可翁筆。右ハ宗祭一二良然、或ハ良詮ト云フ。筑後人…」と記されています。見送幕「鷲図」も模写絵を原図にしたのでしょう。

豆田上町の旧室町の水引幕「龍図(波濤双龍図)」には「一鳳」と刺繍されています。これは大坂の絵師森一鳳(一七九八~一八七二年)のことと思われます。森祖仙、森徹山の系譜を引く森派の絵師です。森一鳳の作品を原画として作成されたものと思われます。ただ、この水引幕に刺繍されたもうひとつの名前「不知火後國男」については不明です。

これらの明治期の四枚の幕は、いずれも大阪の吉井藤七が製作したものです。

五、技法と素材

(一)幕の刺繍技法

日田の見送幕や水引幕に施される刺繍は、日本独特の刺繍技法を用いています。「日本刺繍」と言いますが、ヨーロッパのフランス刺繍とは技法がかなり違います。特に違うのは太い金糸を用いた刺繍技法です。フランス刺繍では撚りのかかった木綿糸を用い、日本刺繍では主に撚りのない絹糸を使用します。そのため日本刺繍は絹特有の艶のある光沢をもつ、高級感のある格式高い作品になります。日本刺繍にもさまざまな技法があります。色糸では「刺し繍(さしぬい)」といって、フランス刺繍のように布に直接縫い付けることもします。

金糸の刺繍

羅紗地に太い金糸で刺繍する場合、フランス刺繍のように縫うことがで

きません。金糸は金箔を漆で張り付けているだけなので、羅紗の緻密に織られた経糸（縦糸）と緯糸（緯糸）の繊維の間を通すと、擦れて糸表面の薄い金箔が削れ落ちてしまいます。そのため、基盤となる強靭な和紙の上に太い金糸を隙間なく並べていきながら、駒糸（綴じ糸）で止めていきます。このような刺繍技法を「金糸駒繍（こまぬい）」といいます。金糸は折り返しながら駒糸で縫い付けて並べていきます。このような技法のことを「金糸折り返し繍」といいます。

駒糸は細くて丈夫な絹糸で、赤や朱色の糸を用いると、金糸刺繍部分が赤味を帯びた暖かい金色に見え、青糸では青味がかった色合いになります。駒糸を目立たないようにする場合は黄色の糸を用います。そのような方法で金糸の刺繍部分を微妙に色分けすることもできます。

それでは、どのように太い金糸が刺繍されるのかを見ていきましょう。豆田地区上町（旧室町）の見送幕「旭出世鯉図」を復元新調する時の状況を写真に撮ったものです。見送幕「旭出世鯉図」は、一匹の鯉が流れ落ちる滝（登竜門）を遡り、滝壺の鯉がそれを見守り、まさに滝の上に朝日が昇ってきた劇的な場面を描いています。写真30は「旭出世鯉図」の原幕の見送幕です。写真31は登竜門の滝を今まさに遡ろうとする鯉を刺繍をしているところです。台状の木枠に基盤となる丈夫な和紙を固定し、胴体部分の上端を金糸で刺繍している段階です。写真32は尾びれ近くの鯉の胴部分を拡大したものです。太い金糸を一本ずつ綴じながら並べていく工程が良くわかります。

写真33は切付け繍の裏側です。黄色い駒糸が細かく縫われていることが分かります。写真34は復元新調のための刺繍の切り付けの試作品で、鯉の尾びれ近くの本体部分とその周辺部です。

写真35では幕の刺繍の構造がわかります。一番上が金糸の刺繍部分で、その下は基盤の緻密な木綿布です。刺繍の端の金糸を折り曲げる「金糸折り返し繍」技法が見えています。その下が盛り上げるために詰めた木綿綿で、最下部は厚い緋羅紗です。写真36は写真34を裏返して見たものです。白い部分は和紙で、鯉の本体部分を羅紗地に縫い付ける時に、綴じ糸が羅紗地を傷めたり変形しないように裏側に当てたものです。独立した刺繍を羅紗地に駒糸で縫い付ける技法を、刺繍の「切付け」といいます。それに対して、羅紗地に直接金糸を駒糸で縫い付ける技法を「直繍（じかぬい）」といいます。鯉の刺繍の試作品では水流と水泡は直繍にしています。

写真37は詰め物となる木綿綿を菱形に縫って固定しています。単に詰め込んだだけでは、綿は自重で下部に落ちます。刺繍が変形しないように綿を糸で縫って固定するのです。

写真 30：見送幕
「旭出世鯉図」原幕

写真 31：滝登りする
鯉の切付け刺繍

写真 35:鯉の刺繍試作品の構造

写真 32:切付け刺繍部分

写真 36:鯉の刺繍試作品の裏側

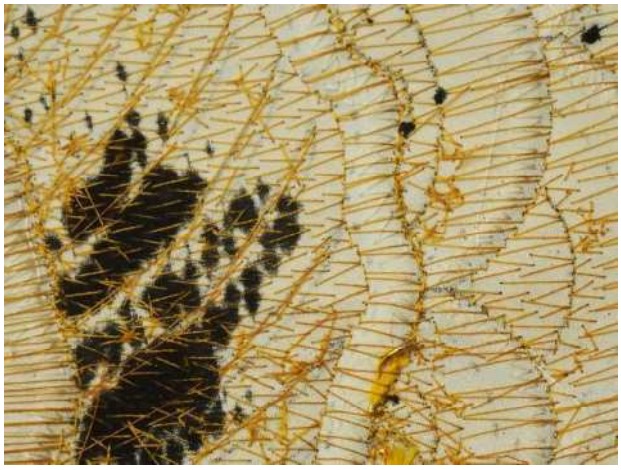


写真 33:切付け刺繍裏側

写真 37:詰め物の木綿綿の固定

写真 34:鯉の刺繍試作品

京都では幕の金糸刺繍の切り付けの裏打ち紙に黒谷和紙を用います。黒谷和紙は京都府綾部市黒谷町など作られ、良質の楮を素材に手漉きで製作しています。丈夫で長持ちするのが特徴で、大正時代には政府から日本一強靭な紙として認められ、軍用乾パンの袋に用いられたそうです。

龍の眉毛などは相良繍（さがらぬい）という技法が用いられます。生地の下から糸を引き出して、表側で糸を結んで模様を作り上げていく刺繍技法です。丸く盛り上がった金糸は玉状になり、整然と並ぶ他の刺繍とは違ったフワフワした質感が出せます。

龍の髭が独立していることがあります。これは針金に金糸を巻き付ける「巻繍（まきぬい）」という技法で、虎の髭を白色の絹糸で巻繍したものもあります。

刺繍を立体的にふくらませる部材を「肉」といいます。和紙・泥紙・紙縒り（こより）・真綿（絹綿）・フェルト・羅紗などを刺繍の表現にあわせて使い分けします。なお、「泥紙」とは泥土を混ぜて漉いた和紙で、兵庫県西宮市名塩地区で生産される「名塩雁皮紙（なじおがんぴし）」のことです。泥土を混ぜる製法により、虫害や変色に強くて燃えにくいといった特徴があります。

銀糸からプラチナ糸へ

写真37を良く見ると、裏打ち紙のあるのは鯉本体部分とその周辺だけです。瀧から流れ落ちる水流を縦の線、水泡を丸で表現しています。この水の表現には銀色の糸が用いられていました。日田祇園の幕類では、水流や水泡などを表現する場合、銀糸を用いていたのです。銀糸は金糸と同様に銀箔を漆で貼り付けた薄い和紙を絹糸に巻き付けたものです。実物の「出世鯉」では銀糸が使用されていました。しかし、復元新調で用いられたのは銀糸ではありません。なぜなら、現在、銀糸は製造されていないからです。銀糸は経年変化によって黒くなるため、現在は使われなくなったのです。そのため、「出世鯉」の復元新調では、プラチナ糸を使用することになりました。プラチナ箔を用いた糸は銀糸よりも光沢がなく落ち着いた雰囲気を持っていて、銀糸のような変色はありません。しかし、現在、プラチナ糸の供給も危ぶまれています。

実は、銀糸の代用として、もうひとつの選択肢がありました。それはアルミニウムを真空蒸着させた薄いポリエステルフィルムを銀箔の代わりにして製作した模造銀糸の使用でした。本物の銀糸よりも鮮やかで、光沢もあります。軽薄な色合いであるとも言えますし、下手をすると、本物の金糸よりも目立ちかねません。それに、ポリエステルフィルムが経年変化にどれだけ耐えられるのかわかりません。本物の銀糸よりも早く劣化する可能性があります。この模造銀糸のアルミ膜を黄赤色の染料や顔料で着色した模造金糸もあります。染料の色を変えれば、赤や青、緑色などをした金属光沢をもった糸も製造できるのです。それに撚り合わせる糸は、ポリエステルやナイロンなどの化学繊維から綿や絹などの天然繊維まで様々な種類の糸を用いることができます。とても派手で綺麗な金糸や銀糸を低価格で入手できるのです。それで良いと考える人もいます。ただ、伝統文化の結晶ともいえる無形民俗文化財の見送幕や水引幕が、そのような模造で作られて良いのでしょうか。私は思います。本物を大切にしたいと。高価なものになることは間違いありません。しかし、現代日本における最高の技と最高の素材で作られた見送幕は、誇りを持って人に見せられるものになる、と信じています。

幕に用いる金糸

伝統的な金糸の製法は二種類あります。和紙に漆を塗って、その表面に金箔を貼り付けて糸状に裁ったものを「平箔（ひらはく）」といい、芯糸の周りに平箔を巻いて撚ったものを「撚金糸（よりきんし）」といい、中世以降の金糸の多くは撚金糸です。撚金糸の「丸撚り」は、芯糸が見えないよ

うにびっしりと箔を巻きつけます。

金糸に用いる金箔の厚みは〇・一～〇・二マイクロメートル（一万分の一～二ミリメートル）ほどです。とても薄いのです。金糸製造は丈夫な和紙と金箔を用いた伝統的手工業でした。幕の刺繍に用いるのは、丸撚りの撚金糸です。

純金糸は純金に近い箔を用いて作られていますが、金箔の純度によって次のような段階があります。少量の銀や銅との合金の場合は「本金糸」と総称します。現在、最も多用されているのが「本金山吹色」だそうです。ちなみに、再建された金閣寺に用いられた金箔の厚さは、通常の倍以上ある〇・五マイクロメートルでしたが、本金山吹色（四号色）の金箔を使用し、総量二〇kgの金が用いられたそうです。

「五毛色」純金９８．９１％ 純銀０．４９％ 純銅０．５９％

「純金色」金箔１号色 純金９７．６６％ 純銀１．３５％ 純銅０．９７％

「本金山吹色」金箔４号色 純金９４．４３％ 純銀４．９％ 純銅０．５６％

「本金ツヤ色」金箔仲色 純金９０．０９％ 純銀９．０９％

このような本金糸の場合、金糸の色が微妙に違うそうです。それ以上に銀や銅の含有量が増やせば、金糸の色は明確に違いが出ます。それを使い分けて刺繍するという技法もありました。しかし、問題があります。銀や銅の割合の多い金糸は、経年変化で変色してしまうのです。銀は錆びて黒くなり、銅は暗緑色に錆びます。そのため金糸の輝きは薄れ、鈍い光沢になってしまいます。

金糸の太さを表す表記としては「掛（かけ）」という単位が用いられます。細い番手から順に一掛（いちかけ）、二掛（にがけ）、三掛というように順に太い番手になってゆき、着物などに用いられる一般用の金糸の中で最も太い金糸が六掛金糸です。長さが一束（そく）で重さが一匁（もんめ）が一掛になります。一束とは糸枠四尺二寸（一・二七m）を百回転させて作るそうです。尺貫法の一匁は三・七五gです。ですから、長さ一二七mで三・七五gのものが一掛になります。ところが、羅紗に刺繍される純金色の金糸には、七掛・八掛・一〇掛・一二掛・一四掛・一六掛・一八掛などの太さがあります。とても太い金糸を用いるのです。単純に計算すると一八掛の金糸は、長さ一二七mで六七・五gになります。特別に太い金糸なのです。日田の幕では、例えば大和町の見送幕「麒麟図」の場合、金九七・五％の本金糸を用いて、三掛けと一〇掛けから一四掛けの金糸を用いています。太い金糸では針穴に通して縫うのは不可能です。畳針以上の太い針になって、金糸も刺繍する対象となる布もボロボロになってしまいます。金糸がいかに貴重で繊細なものなのか、おわかり頂けたでしょうか。

色糸の刺繍技法

色糸は撚りをかけないで縫うことが多いのですが、岩の表現では、二色、あるいは三色の色糸を撚りあわせ、それを何種類も交互に刺繍して、岩の色を表現する技法があります。灰色一色の糸で表現しません。フランス印象派の絵画の点描のように、全体でひとつの色として認識されるのです。

（二）江戸と明治の幕の比較

豆田地区上町の旧室町と旧八幡町の「龍図」の水引幕２点を令和六年十二月に拝見しました。いずれも「龍図」という名称ですが、「波濤双龍図」の水引幕と表記した方が良いと思うのですが、いかがでしょう。その方が図柄を正確に表していると思います。水引幕の両側面に二頭ずつの龍を描いていますので、合計四頭の龍になります。これは中心となる山鉾の周りの東西南北を表現している可能性があります。いずれにせよ、同一テーマで製作された水引幕ですので、その作風の時代的な違いを比較するには最適です。

江戸時代の水引幕「龍図」

豆田上町の旧八幡町の「龍図」の水引幕は、中央右に神紋である「左三つ巴」、その左に「五瓜唐花」を金糸で刺繍し、左側に右向きの龍が波の中を泳ぐ姿を、右側には右後方を振り返りながら波の中を泳ぐ龍の姿を刺繍しています。緋羅紗地に金糸を中心に一部を色糸で刺繍を施しています。

横幅は九八二cmで、縦が七七cm(乳を含めると約八〇・五cm)です。良質の緋羅紗を用いており、ほとんど褪色していません。下端の隈耳の幅は約一〇cmで、左右の両端には本来はない隈耳を縫い付けています。そして、隈耳の上に雷文を金糸で刺繍しています。また、水引幕の上端を藍染の紺木綿で覆い、同色の木綿布の乳を取り付けています。

全体を純度の高い上質の金糸で刺繍しています。色糸は龍の背鰭や脚の鰭などに緑の色糸、耳部を黒・白・赤色の色糸で刺繍しています。胴体部などの切り付け刺繍には肉盛りの綿は入っておらず、極めて平面的です。隈耳は幅五cmで、雷文を刺繍していません。裏地は手紡ぎの藍染めの木綿布で、約三〇cmの着尺の幅の木綿布を三枚縫い合わせています。目には吹きガラス製の玉眼をはめ込み、爪は銅板に厚い銀鍍金を施しています。残念ながら、製作記録等を刺繍しておらず、製作経緯を記した史料もないそうです。

財団法人西陣織物館顧問の藤井健三先生によれば、神紋の金糸の縫い方(置き方)は京都や大阪の技法ではないそうです。また、この水引幕の刺繍が盛り上がりの少ない平面的なものであること、色縒糸を要所に用いて、極めて良質の金糸を使用していることなどから、製作時期が江戸後期の長崎刺繍である可能性が高いと考えられます。

写真 38:豆田上町(旧八幡町)水引幕
「龍(双龍波濤)図」部分・江戸後期

写真 39:豆田上町(旧室町)水引幕
「龍(双龍波濤)図」部分・1897 年

明治時代の水引幕「龍図」

旧室町の水引幕「龍図」は明治三〇年（一八九七）に大阪で製作されました。中央右に神紋である「左三つ巴」、中央左に「五瓜唐花」を金糸で刺繍し、輪郭に太い黒糸を刺繍して強調しています。神紋の右側に左向きの龍が右前脚の三本の爪で宝珠をつかんで波間から姿を現す姿を刺繍し、同じく左側には右向きの龍が波間から出現する姿を刺繍しています。龍に用いた金糸は数種類使い分けされており、それぞれ色が異なっています。また、鱗には濃い膠の墨を差して立体感を出していますが、墨が薄くなった部分を黒糸で補修している部分もあります。吹きガラス製の玉眼をはめ込み、爪や牙は象牙です。髭は針金に金糸を巻き付けたもので、眉に太い黒糸を植え込んで表現しています。緋羅紗の隈耳の幅は約九㎝で、下端は隈耳をそのまま使用し、左右の端には切り取った隈耳を縫い付けています。そして、隈耳には雷文を金糸で刺繍しているのです。たてがみとして白くて長い獣毛（ヤクの毛か？）を植え付けています。幕の右端には「室町（縦書き楷書体）」と四角く囲った「安全（横書き篆書体）」の文字を金糸で刺繍しています。同じく左端には「一鳳」と、その下の四角い枠内に「不知火後國男」、その左側には大きく「明治三十年（1897）」「酉六月新調」、その左下に小さく「易堂」と金糸で刺繍されています。

幕の上端を黒い木綿布で覆い、黒い木綿布製の乳を縫い付けています。水引幕を山鉾に懸け回すための木綿縄が附属していました。幅約二〇㎝の木綿布二枚を綯って作った縄で、古い物ではないのかも知れませんが、他にあまり類例を見ない珍しいものです。

水引幕はかなり大がかりな修理が施されていました。龍の胴には赤味がかった金糸を用いているのですが、補修時に刺繍を赤糸で縫い止めて一層赤味が出るようにしています。また、龍が立体的に見えるように、綿を付け加えて刺繍の肉盛りをかなり高めています。しかし、その結果、各部分で造形的に破綻をきたしています。波間から現れた龍の胴が急激に高まるため、水中から現れてくるように見えないのです。また、左側の龍の顔部分が変形して、上方の左目が隠れてしまっています。刺繍の肉盛りを高めるため、刺繍の幅が狭くなるなど、過剰な修理と追加によって本来の姿を保っていないのです。できれば、適正な修理を施して、本来の姿に戻すべきでしょう。

この水引幕には「龍枕」（幅二七㎝・高さ三二㎝・厚さ約八㎝）二点が附属していました。これは水引幕を収蔵する時に刺繍が壊れないように入れるスペーサーです。丈夫な和紙の袋に鉋屑を入れたもので、表に「龍枕四個内之内」と墨書され、裏に「大阪市　高来橋（高麗橋）壱丁目　吉井藤七桔梗屋事」と墨書きされています。これによって大阪高麗橋にあった刺繍屋吉井蔵七（桔梗屋）がこの水引幕を作成したことがわかりました。

（三）緋羅紗

織物としての羅紗

日田祇園の幕には羅紗という羊毛の厚手の織物が用いられています。羊の飼育をしていなかった日本では、当然、ウールの布を織ることはありませんでした。

一二世紀頃にセルビアの首都ラサで生産されていたので、ラシャと呼ばれるようになったそうです。最初に南蛮貿易で日本にもたらされたため、ポルトガル語の「**raxa**」が語源となり、日本では「羅紗」という漢字で表記されるようになります。

江戸時代になると、オランダから長崎を通して輸入され、防水と耐火能力が高いので、雨具の合羽や防火の火消し装束として用いられました。ヨーロッパ近世において、羅紗の主要生産はポーランドでした。ヨーロッパの近

世とは、一五世紀のルネッサンスから始まり、一五世紀末から一六世紀にかけての大航海時代、そして一六世紀の宗教改革の時代を経て、絶対王政が確立した科学革命と啓蒙思想の時代までを言います。ヨーロッパは一八世紀後半のイギリス産業革命と一七八九年のフランス革命によって近代へと移行します。そして、産業革命後のイギリスでは蒸気機関を用いた機械織機によって羅紗が生産されるようになります。

羅紗は一見すると、フェルトのように見えますが、それぞれ全く違う構造になっています。フェルトはヒツジやラクダなどの動物の毛を圧縮してシート状にした繊維品の総称で、織ったり編んだりせずに繊維を絡み合わせて作られるのが特徴です。それに対して、羅紗は毛織物の一種で、織物組織は平織、綾織、繻子織などで緻密に織ったものを縮絨（しゅくじゅう）させてから、毛羽（けば）の先端を剪毛（せんもう・切って）して仕上げます。そのため、表地からは織目は見えません。

縮絨とは羊毛などの繊維に圧力や摩擦、熱を加えて収縮させることで、生地を緻密にして厚みや強度を増して、ふんわりした風合いを出し、肌触りが良くなって保温性も高まります。また、仕立て後の狂いが少なくなります。

羅紗の隈耳と雷紋

羅紗の織り幅は一五〇cm前後で、見送幕の横幅は羅紗の織り幅そのままです。また、水引幕の場合は、縦が七五cmほどなので、羅紗地を縦に二分割したものと考えられます。

江戸時代から明治時代に輸入された羅紗には、緯糸（横糸）を折り返す織り幅の両端に隈耳（クマミミ。熊耳と表記するのは慣用か）と呼ばれる暗灰色の幅広い帯状の部分がありました。隈耳の幅は七cmから八cmのものや幅五cmのものもあります。現在生産されている羅紗には隈耳はありません。製作技術に何らかの変化があったと推測されます。藤井先生は縮絨工程で隈耳部分ができるのだろうと言われています。隈耳部分で牽引して、織り幅が縮小するのを防いだものと思われます。

隈耳の上に「雷文」と呼ばれる方形の渦巻きが連続する幾何学文様を金糸で刺繍します。見送幕の場合は左右端と下端に雷文を施しますが、下段に隈耳を縫い付けて雷文を刺繍することもあります。また、水引幕では隈耳部分を下端にして雷文を施し、幕の左右端に切り取った隈耳を縫い付けて雷文の刺繍をすることもあります。

雷文を見て、ラーメン鉢の文様を思い浮かべる人が多いと思います。なぜ、日田祇園の見送幕や水引幕に雷文を施しているのでしょうか。実は渦巻き状になった方形の連続は、右巻きと左巻きで、陰と陽を表し、陰陽が和するところに雷が鳴ると考えられていました。ですから「雷文」なのです。雷文は古代中国からある吉祥を意味する文様だったのです。

ウクライナ産の羅紗

豆田上町の旧八幡町の「龍図（双龍波濤図）」の水引幕の緋羅紗地右端の下部に「王冠マーク」、その右側に「РЫБНИКОВА БАБКИНЫХ」というキリル文字が二段に金色の塗料で捺印されているのを見て驚いてしまいました。今まで、羅紗地に文字が捺印されていた例がなかったからです。日本語に翻訳すると、上段の「リブニコワ」はスラヴ民族のファーストネーム（姓）で、下段の「ババキニー」はヒマワリの種という意味であることがわかりました。

写真 40：王冠マークとキリル文字

ヒマワリの種と知って、瞬時に連想したのは映画「ひまわり」でした。一九七〇年に日本で公開されたイタリアの名画です。主演はソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤンニ。第二次世界大戦終結後、出征したまま行方不明の夫アントニオの消息を、イタリアで何年も追い求めてきたジョバンナは、ついにソビエト連邦（現在のウクライナ）に夫を探しに行くことにしました。しかし、探しあぐねた夫は地元女性のマーシャと共にヒマワリ畑に囲まれた民家で穏やかに暮らしていました。アントニオは凍死寸前にマーシャに助けられたのですが、その時は記憶を失っていました。二人には幼い娘もいます。失意の中でジョバンニはイタリアに帰ります。悩んだアントニオは病気の老母を見舞うという理由で、イタリアに戻り、ジョバンナのアパートを訪れて再会します。しかし、感情はすれ違うばかり。その時、隣の部屋から赤子の泣き声が聞こえてきます。その子の名前を尋ねると、アントニオとの答え。二人の人生はもう交わらないのです。翌日、ミラノ中央駅でアントニオを見送るジョバンナは、涙を流しながらホームに立ち尽くすのでした。

「ひまわりの種」という言葉から、学生の頃に見た映画の強烈な印象をフラッシュバックしてしまいました。この映画はソビエト連邦時代のウクライナで撮影されたものです。

この水引幕が作られた一九世紀、ポーランドは羅紗の主要産地でした。ポーランドは東側の国境がウクライナに接しています。ポーランド人もウクライナ人もスラブ民族です。スラブ民族は、ロシア人、チェコ人、ブルガリア人、セルビア人など、主に東ヨーロッパに居住する人たちで、スラブ語派の言語を話す諸民族の集合体です。ロシア・ブルガリア・セルビア・ウクライナなどのロシア正教圏ではキリル文字が使用されていますが、ポーランドやチェコなどのカトリック圏ではラテン文字（ローマ字）を用いています。ですから、この水引幕に使用された羅紗はポーランド産ではなく、ウクライナ産である可能性が高いのです。その頃、ウクライナはロシア帝国（ロマノフ王朝）の支配下にあり、王冠マークはロシア帝国を表していると考えられます。なお、現在のウクライナの国花はヒマワリです。そして国旗の青は果てしなく続く空の色、黄色は大地を覆う麦、あるいはヒマワリだそうです。

このことから、「リブニコワ・バブキニー」とはウクライナ西部の羅紗工場の名称「リブニコワ家のひまわりの種工場」ではないかと推測したのです。日田という九州の一隅が、防衛戦争で悲惨な目に遭っているウクライナと歴史的に結びつく可能性があるのです。

鮮やかな深紅

見送幕や水引幕に用いられている緋羅紗の赤を、江戸時代の日田の人たちは「猩々緋」と呼んでいました。

この鮮やかな緋羅紗を、江戸時代にはヨーロッパから輸入していました。かつて、日田の古い緋羅紗の幕は、生成りの羅紗を輸入して、日本の伝統的な茜（あかね）染めで緋色にしたと考えられていました。しかし、藤井先生から茜染めなら黄色味がかった赤のはずだと言われました。

ヨーロッパから輸入された緋羅紗は、コチニール（Cochineal）という昆虫由来の染料で染めたものでしょう。

天然素材しかなかった時代、鮮やかな赤を発色させることはとても困難でした。ヨーロッパではオスマン帝国（一三世紀末～一九二二年）からもたらされる植物染料の茜（あかね）が赤色染料の主流でした。ヨーロッパの染色職人たちは、ヨーロッパで自給できる赤色染料を求めて試行錯誤を繰り返しました。ラックカイガラムシ（Laccifer lacca）の分泌液から作るシュラック（shellac）など、さまざまな染料を試み、茜のような鮮やかな赤を出そうとしたのです。しかし、すぐに色あせたり、黄色がかった赤しか作り出せませんでした。唯一、ケルメス・カイガラムシという地中海沿岸に棲息する昆虫の雌の成虫をつぶして作った染料（Kermes）で鮮やかな赤に染めることが可能でした。しかし、この虫はカシ（樫）に寄生し、採取が難しかっ

たために生産量が極端に少なく、古代から中世にかけては、王侯貴族用の高級毛織物や絹布に用いることしかできませんでした。

東ヨーロッパからロシアにかけ分布するポーランド・カーミン・カイガラムシの雌の成虫を原料にした赤色染料もありました。ポーランド・ケルメスといい、「聖ヨハネの血」とも呼ばれていました。クレランサス（ナデシコ科）の根に棲息します。地中に潜んだままで、一株に四〇匹ほどしか付かないのでとても採取が大変でした。これを英語でポリッシュ・ラック（Polishlac）と言ったようです。Polish はポーランド、あるいはポーランド人を意味します。コチニール以前には、これで毛織物を染めていたようです。これがポーランドの緋羅紗製造の始まりだったのかも知れません。

大航海時代、コロンブスによるアメリカへの到達によって、ヨーロッパの人々は新大陸の存在を知り、スペイン人やポルトガル人たちはアメリカ大陸に侵攻します。エルナン・コルテスたちによって一五一九年に征服されたアステカでは、コチニール・カイガラムシを磨りつぶした染料（コチニール）を使っていました。スペインでは、これをを「新大陸のケルメス」として、ヨーロッパに輸出するようになります。

コチニールの登場はヨーロッパに衝撃を与えます。そして、赤色染料としてヨーロッパを席巻してしまいます。それまでの染料とは比較できないほど鮮やかな発色する赤色染料が、大量に輸入されるようになったからです。

コチニールはコチニール・カイガラムシの雌の成虫を原料にします。雌の成虫の体長は三㎜ほどの褐色の貝殻状で、翅がなくて、ウチワサボテンに寄生して枝に固着していますが、雄には翅があって敏捷に動きます。コチニール・カイガラムシを養殖する地域もあったそうです。

それにしても、長い年月の中で、日田の近世の緋羅紗がほとんど傷みもせずに褪色もしていないことに驚かされます。今でも色鮮やかで、とても綺麗だからです。

さまざまな素材

見送幕や水引幕などの装飾は刺繍が中心ですが、金糸や色糸以外にさまざまな素材と技法が施されています。鯉の鱗の一部に墨を塗って立体感と鯉らしさを表現する方法が使用されていました。鯉の胴体は金糸刺繍ですから、普通の墨ならはじかれてしまいます。そこで、糊材である膠（にかわ）の含有量を増やしたドロドロの墨汁を塗布することにしました。その部分を黒色の撚り糸で刺繍するという技法も提案されたのですが、本来の墨塗りで表現することにしたのです。

虎や龍の眼球は吹きガラスで作られた玉眼です。ガラス内部に黒い瞳などを描いた布や和紙を入れて固定します。そのため、とてもリアルになります。

龍や虎の爪や牙は象牙で作られていました。龍の刺繍の中には銀鍍金した銅を用いているものもあります。銀鍍金した銅での再現は問題ないのですが、現在、象牙はワシントン条約（絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約）によって国際取引は原則禁止となり、日本国内では象牙と象牙製品の商業取引も原則禁止されています。そのため、復元新調で象牙を使用することはできません。ところが、驚いたことに抜け道がありました。既に絶滅しているマンモスの象牙はワシントン条約に違反しないというのです。そこでマンモスの象牙を用いることにしました。

大和町二丁目の見送幕「岩に虎図」の虎は金糸の刺繍ですが、黒い縞模様部分は赭熊（しゃぐま・ヤクの毛）を「植えつけ繍」という技法で製作しています。ヤクは偶蹄目ウシ科ウシ属に分類される偶蹄類（ウシ族）の動物です。中国のチベット高原や雲貴高原に棲息し、家畜のヤクも野生のノヤクもいます。寒冷な高地に棲息する牛で、毛が長いのが特徴です。

また、川原町の見送幕「素戔嗚尊大蛇退治」では素戔嗚尊が身につけている勾玉は翡翠で、それに色水晶の丸玉がついているそうです。

(四)復元新調という考え方

文化庁の助成事業である重要無形民俗文化財の用具等の修理事業では、修理と共に復元新調が可能です。その修理事業の主体は日田祇園山鉾振興会です。修理や復元新調によって、重要無形民俗文化財、この場合は日田祇園の実施を円滑に継続させることが目的となります。

国の補助は事業の五〇%で、大分県と日田市がいくらか補助を出します。それは山鉾を運営する組織に支援するという考え方です。自助努力が基本なのです。江戸時代ならば、山鉾の台車、それに見送幕や水引幕などを新調する時には、町内の掛屋という豪商が特別に寄附をしていました。現在はそのような豪商はいませんので、国が地元の豪商の代わりをしていると考えても良いでしょう。しかし、国庫補助や県市の補助は、国民や県民、市民の税金なのです。恣意的な新調や修理はできません。学術的な裏付けと地元の同意が必要です。そのため、日田祇園山鉾保存委員会が存在し、変更点などをひとつひとつ検討して確認するのです。

復元新調では、旧態(古い姿)に戻すこと、伝統的な技法を用いること、素材等を変更する場合は良質で長期の利用に耐えられるものにすること、などが基本的な考え方になります。また、山鉾の場合は、安全性や堅牢性も考慮されます。

幕の復元新調

日田祇園の江戸期の幕の金糸は二〇〇年ほど経過しているのに、褪色は比較的わずかで済んでいます。そして平面的な造形は繊細で上品な作品を創り出しています。それに対して、明治時代に製作された多くの幕の金糸が変色しているのは、銀や銅の割合が高いためです。しかし、明治時代の日本刺繍の技法はとても優れたもので、立体的であると同時に写実性を高めた迫力ある作品に仕上がっています。それを見比べて鑑賞するのも一興かと思います。

明治時代の日田祇園の幕は既に一〇〇年以上経過していますし、江戸時代の幕は二〇〇年近い歳月を経ています。単なる修理では、これから長く使用するには無理があります。日田祇園の見送幕や水引幕は歴史的にも文化財的に価値があります。修理して使い続ければ、金糸も羅紗地も脆弱化していますので、使い潰すことになりかねません。そのため、これから一〇〇年、二〇〇年と使い続けることを考え、現在入手できる最高の素材と最高の伝統技術を用いて復元新調を行うのです。遠い将来にわたって、鮮やかに輝く見送幕や水引幕を日田祇園の山鉾に懸けられ続けることを念願して復元新調をするのです。

復元新調の場合、褪色した色糸の復元をします。古い糸の光の当たっていない部分を探り出し、その色を参考にするのです。また、質の高い金糸を使用し、金色の微妙な違いは、銀や銅の割合を増やすのではなく、綴じ糸の色で表現します。復元新調された新幕を見て、その色彩の華麗さに驚かされます。

本格的な原幕の修理をすることになれば、ふくらませ過ぎた刺繍は、詰め物がどれだけ付け加えられたかを確認してから減量します。古い幕の多くは、駒糸が切れて金糸などが元の位置を保てなくなっているものがあります。これを元の位置に戻して綴じ直し、元の姿に戻す必要があります。また、詰め込みすぎた綿などを抜いて、本来の姿に戻さなければなりません。そのような最小限の「復元修理」が必要となっているのです。

幕の寸法とデザイン

原幕のデザインは大切です。恣意的な変更はできません。ふくらみ過ぎを修正して、刺繍の幅が少し広がるのは、復元ですから当然です。

山鉾の後ろに懸垂する見送幕の場合、新旧の幕の寸法はあまり変わりません。羅紗地の幅がほぼ決まっていますし、古い原幕を計測して、変形部分

を考慮して復元新調する幕の寸法を決めるためです。しかし、水引幕の寸法は、そう簡単ではありません。水引幕の寸法は、山鉾の台車の大きさに左右されるからです。昔の山鉾の台車と現在の山鉾、特に新調修理した山鉾の台車との大きさは全く違っています。だいたい、古い台車はやや小さくて低いものが多いのです。

川原町の水引幕の復元新調を例にして、原幕と新幕を比較してみましょう。原幕は明治二五年（一八九二）製作の「龍虎図」でした。乳（チ・幕を吊るための輪状になる布片）を除いた、原幕の寸法は縦九四～九六㎝×横九九四～九九六㎝です。同様に新調幕は縦九六㎝×横九九八㎝と、屋台の幅と長さに合わせて縦と横幅とを若干伸ばしています。囃子台の天井までの柱の高さが高くなった分、幕の縦方向を伸ばしています。また、台車正面の2つの神紋と台車側面の左右には龍虎が向かい合う刺繍が綺麗に納まるように、それぞれのレイアウトを調整しています。なお、原幕右端の「隈川原町上中組」と左端の「明治廿五稔辰六月新調」という文字は、台車に懸けた時、台車の背後に位置することなります。そして、旧来のデザインを守るという点で、そのままの形で金糸を刺繍します。そして、水引幕を吊り下げる乳の配列は現在の台車の金具の間隔に合わせます。

港町の水引幕の復元新調では、原幕と新調幕の寸法は変わりませんでした。水引幕は山鉾の台車をぐるりと取り囲みます。刺繍が四隅の柱にかかると折れ曲がり、損傷してしまいます。そうならないように神紋の刺繍を正面に綺麗に入るようにしました。そして、宝珠の刺繍が両側面の中央になるようにレイアウトを少し変更したのです。

国指定の重要無形民俗文化財に指定されている山鉾屋台の幕類は修理することもありますが、主に復元新調をします。幕類を復元新調するのは、祭で使用するためです。それまで使用してきた古い幕類は、歴史的にも文化的にも価値が高いので、文化財として保存することになります。場合によっては、大切にしながら祭りで使用することもありえます。

【参考文献】

・『天領日田の文化財』大分県教育庁文化課・一九八四年。
・広瀬淡窓『増補 淡窓全集 中』日田郡教育会・思文閣・一九七一年。
・『平成山鉾への道』隈町十メーター山鉾を造る会・一九九一年。
・『私たちの川原町』川原町青壮年団・二〇〇三年。

正月に行われる作法の由来

大神信證

初詣の由来は？

古くは、大晦日の夜から元旦にかけて家長が氏神様を祀っている神社に徹夜でこもる風習があったことから、お籠もりのなかでも特に「年籠もり（としごもり）」と称され、新年の豊作や家内安全などを祈願する行事であった。私たちの国では、祭り行事の前には精進潔斎をして臨むという作法があり、やがてのちに「除夜詣」と「元日詣」に分かれていった。除夜の鐘も108の煩悩を滅すためと言われるが、本来は精進して心身を清めることであり、神詣は氏神様にその年の幸福を祈ることである。なお、年神様とは先祖神であり、祖先の霊でもある。そして「元日詣」が初詣の原形となり、やがて流行することになったが、江戸時代後期に起こった習慣のなかに元日にその年の恵方にある社寺に参拝する「恵方詣り（えほうまいり）」があり、盛んとなった。現在の恵方に海苔巻きを食べるとは恵方の神社への参拝が起源だと推測できるが、商魂たくましい人々が発案したことである。初詣参りの全国的流行の一端はテレビでも放映されていたが、明治時代になり鉄道が発達すると、遠くの社寺へも行けるようになり、そこで鉄道会社が沿線の社寺（ここでは成田の新勝寺）への参拝を宣伝するために「初詣」と称してキャンペーンを行い、庶民の間に広がったとされている。初詣も商業ベースにて広まったと理解してよいといえ、クリスマスやバレンタイン、ハロウィンなど商業ベースでできたものが多くなっている。日本に伝わった伝統的行事がおろそかになり日本の心の喪失につながり、行事の由来や作法がおざなりになった結果といえるだろう。

「年越し」の意味

年越し（としこし）、オオトシ（大年）、トシノヨ（年の夜）などともいう。一年の境目の大晦日の夜のことで、年の改まりに際しての年神祭や年重ねに関する行事がある。

古くは一日の始まりは日没であり日の出と共に始まる一日は後の時代に始まった観念である、年越しの行事大晦日の夕方から始まる。新年を迎える掃除（煤払など）も終わり、年神様を迎え、神酒、餅、魚、野菜などを供えて、その前で家族揃って正式の食事をする家が多くあった。元日の朝にはその神饌を下げて家族一同でいただくことによって年神様の霊力をいただき、新しい年を一つ加えることができると考えられていた。大晦日夜の食膳をオセチ、トシトリなどといってハレの食事と考えているのは全国的習慣である。年越しそばもその一つで、ハレの食べ物であった。小那を引き、練り込み、湯がいて食するという手間のかかるものこそハレの食事であった。従って今日は簡便な食事と考えるうどんも同様にハレの食事と考えてよい。

またお籠もりと称して大晦日の夜は眠らずに過ごすべきとされ、もし禁を破れば白髪になるとかしわが増えるという伝承があるのは、この夜が、訪れた年神に侍座すべきときと考えられていたことも先祖を迎え待つとの考え方であろう。これら各家の習慣とは別に、村人が神社に年籠りして夜を明かす例もあるが、すでに多くは元旦の未明に参詣するように変わってしまって現代に至っている。大晦日だけではなく、1月6日を六日年越し、14日を十四日年越しといい、節分をも年越しというのは、これらの夜から次の七日正月、十五日正月、立春にかけてが、いずれも神（年神）の来臨を仰ぐ年改まりのとき同様と考えられてきたものと思われる。牛馬や道具類にもしめ飾りや供え餅をして道具の年取りをさせ、新たな力を賦与させようとする例もあるが、最近見なくなった車に注連飾りをする光景は以

前に多くあった。これも日本人らしい考えの表れといえようか。

正月作法あれこれ

「門松（かどまつ）は、正月に日本の家の門前などに立てられる松や竹を用いた正月飾りである。松飾り、飾り松（かざりまつ）、立て松とも言う。古来、木の梢に神が宿ると考えられていたことから、門松は年神を家に迎え入れるための依りとも言われる。「松は千歳を契り、竹は万歳を契る」と言われ木花の上位の地位を占める。年神はこの松門を目印に降臨してくると言われる。竹は巫女が神楽を舞うときに手にする地域もある。神が依りつくという意味合いである。

松は冬でも青々とした常緑高木で、新しい生命力の象徴となっており、神様が宿ると思われてきた常盤木（年中葉っぱが落ちない木）の中でも、松は「祀る」につながる樹木であることや、古来の中国でも大切な樹木であった。

平安時代の宮中では「小松引き」という行事が行われた。これは、初子の日に外出して松の小木を引き抜くという貴族の遊びで、持ち帰った「子の日の松」を長寿祈願のため愛好する習慣があり、門松はこれが変化したものと考えられている。現在も関西の旧家などに（現在は京都祇園町のお茶屋の入り口に）、「根引きの松」という玄関の両側に、白い和紙で包み金赤の水引を掛けた、根が付いたままの小松（松の折枝は略式）が飾られている。

現在の門松は中心の竹が目立つが、その本体は名前で解るとおり「松」である。また松と同様に竹も神祭りに多く使われている。古来神や仏の供え花はシキミやサカキなどの常磐木であった。京都の葬式の飾りはシキミ花である。

時代が下がると武士たちの間でそれぞれの流儀が生まれた。例えば竹の先端部の形状は、斜めに切った「そぎ」と、真横に切った「寸胴（ずんどう）」の2種類があり俗に○○流などと称するようになった。。武田氏の本国があった山梨県では現代において、竹を寸胴にしたものを「武田流門松」と称して山梨県庁舎などに飾っている。門松の様式には、地方により差がある。関東では3本組の竹を中心に、周囲に短めの若松を配置し、下部をわらで巻く形態が多い。関西では3本組の竹を中心に、前面に葉牡丹（紅白）後方に長めの若松を添え、下部を竹で巻く。豪華になると梅老木や南天、熊笹やユズリハなどを添える。また、各地には様々な門松があり、兵庫県西宮市の西宮神社では、十日えびすの宵宮で市中を巡幸するえびす様に葉先があたらないよう、松を下向きに付け替えて「逆さ門松」にする。

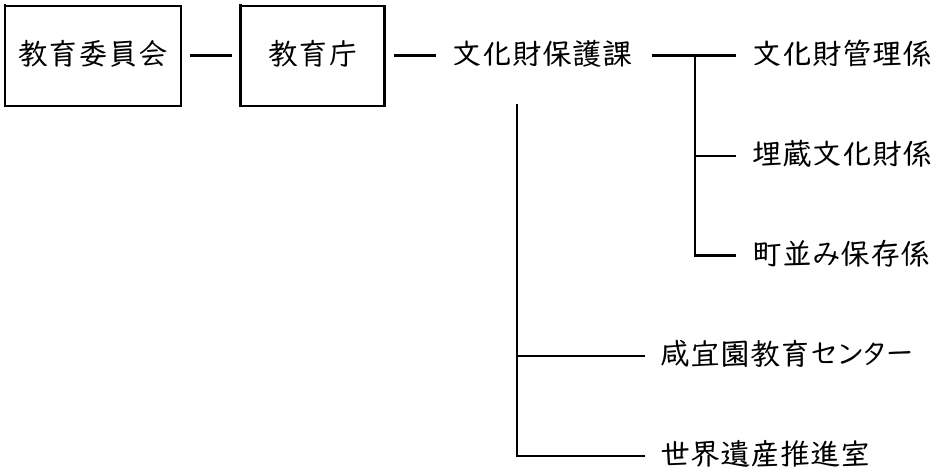
一部民俗学事典やネットの掲載物を引用、参考にしている。

根引き松

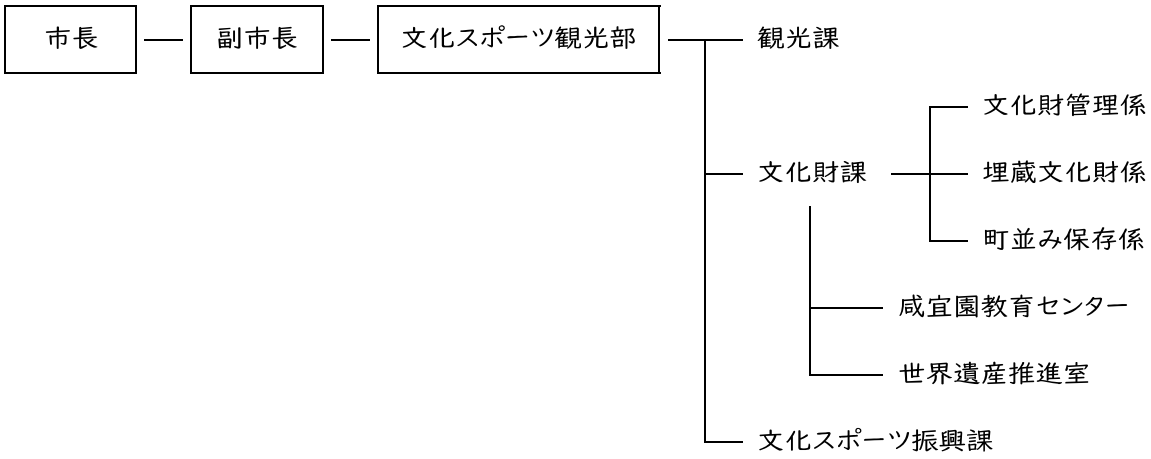
日田市文化財（保護）部局年報

Ⅰ．組織体制

1.令和６年度　文化財保護部局



2.令和７年度　文化財部局



3.日田市文化財保護審議委員

任期：令和５年８月１日～令和７年７月31日

No.	氏名	担当分野	所属
1	渡辺　文雄	有形文化財［絵画・彫刻他］	元 別府大学教授
2	大津　祐司	有形文化財［古文書・古記録］	大分県立歴史博物館
3	下村　　智	有形文化財［考古資料］	別府大学名誉教授
4	伊東　龍一	有形文化財［建造物］	熊本大学名誉教授
5	段上　達雄	無形文化財	別府大学名誉教授
6	後藤　宗俊	史　跡	別府大学名誉教授
7	神川　建彦	天然記念物	特定非営利活動法人 初島森林植物園ネットワーク 理事長
8	渡辺　智恵美	保存技術	別府大学史学・文化財学科教授
9	江面　嗣人	伝統的建造物	岡山理科大学 建築文化歴史研究センター長・特担教授
10	大森　洋子	文化的景観	久留米工業大学建築・ 設備工学科教授、学長補佐
11	大神　信證	文化財の活用	日田市文化財保護員協議会
12	佐藤　隆博	文化財の活用	日田市小学校教育課程等研究協議会 社会科部会副主任

任期：令和７年８月１日～令和９年７月31日

No.	氏名	担当分野	所属
1	小林　知美	有形文化財［絵画・彫刻他］	筑紫女学園大学文学部教授
2	大津　祐司	有形文化財［古文書・古記録］	大分県立歴史博物館
3	下村　　智	有形文化財［考古資料］	別府大学名誉教授
4	伊東　龍一	有形文化財［建造物］	熊本大学名誉教授
5	段上　達雄	無形文化財	別府大学名誉教授
6	田中　裕介	史　跡	別府大学文学部教授
7	河津　文昭	天然記念物	樹木医
8	佐藤　隆博	文化財の活用	日田市小学校社会科部会推薦 （桂林小学校）

4. 日田市文化財保護員

任期：令和４年４月１日～令和７年３月31日

No.	地区	氏　名	専門分野	No.	地区	氏　名	専門分野
1	旧市内	大神　信證	歴　史	12	天瀬町	織田荘太郎	郷土史
2		園田　　大	中世史	13		河津　正明	郷土史
3		髙瀬　泰孝	建　築	14		髙倉　重昭	郷土史
4		野田　髙巳	郷土史	15	大山町	江田　通徳	郷土史
5		原　　正幸	民　俗	16	前津江町	佐藤　光信	郷土史
6		原田　勝宏	考　古	17		長谷部良之	郷土史
7		原田　　進	建　築	18		松木　紘輝	郷土史
8		藤野　美音	考　古	19		後藤　則男	郷土史
9		三松　健次	建　築	20	中津江村	長谷部　徹	郷土史
10		室　　哲	建　築				
11		森山　雅弘	郷土史				

任期：令和７年４月１日～令和10年３月31日

No.	地区	氏　名	専門分野	No.	地区	氏　名	専門分野
1	旧市内	大神　信證	歴　史	11	天瀬町	河津　正明	郷土史
2		園田　　大	郷土史	12		髙倉　重昭	郷土史
3		髙瀬　泰孝	建　築	13		竹尾　浩享	
4		原　　正幸	民　俗	14	前津江町	後藤　則男	郷土史
5		原田　勝宏	考　古	15		佐藤　靖明	
6		原田　　進	建　築	16		長谷部良之	郷土史
7		藤野　美音	考　古	17		松木　紘輝	郷土史
8		三松　健次	建　築	18	中津江村	長谷部　徹	郷土史
9		室　　哲	建　築				
10		森山　雅弘	郷土史				

Ⅱ.文化財の指定

Ⅰ.指定文化財等の状況

現在、日田市内の指定等の文化財は、国指定文化財 21 件、県指定文化財 39 件、市指定文化財 89 件、国選定文化財 2 件、国選択文化財 3 件、県選択文化財 2 件、そして国の登録有形文化財が 29 件である。　※令和 8 年 1 月 1 日時点

国指定・国選定・国登録・国選択

区分、名称又は物件	所在地	指定年月日	摘要（年代ほか）
【重要文化財】			
木造十一面観音立像	城町２（慈眼山仏像収蔵庫）	昭25.8.29	鎌倉時代
木造兜跋毘沙門天立像	城町２（慈眼山仏像収蔵庫）	昭25.8.29	平安時代後期
木造毘沙門天立像	城町２（慈眼山仏像収蔵庫）	昭25.8.29	文治３(1187)年の銘
木造四天王立像	城町２（慈眼山仏像収蔵庫）	昭25.8.29	元亨元年(1321)年の銘
木造毘沙門天立像	城町２（慈眼山仏像収蔵庫）	昭25.8.29	平安時代後期
行徳家住宅	夜明関町	昭50.6.23	天保13(1842)年
大野老松天満社旧本殿	前津江町大野	昭53.5.31	室町時代、三間社流れ造り栩板葺
旧矢羽田家住宅	大山町西大山	昭57.6.11	江戸後期、別棟形式の民家
長福寺本堂	豆田町	平18.7.5	寛文9（1669）年の建造
草野家住宅	豆田町	平21.12.8	享保～明治初期の建造
吹上遺跡出土品	宇佐市（大分県立歴史博物館）	平22.6.29	弥生時代中期の武器、貝輪などの副葬品
【史跡】			
咸宜園跡	淡窓2	昭7.7.23	江戸後期～明治期にかけての私塾跡
穴観音古墳	内河町	昭8.2.28	古墳時代後期
廣瀬淡窓旧宅及び墓	中城町・豆田町	昭23.1.14	私塾・咸宜園を主宰 H25.3.27追加指定・名称変更
法恩寺山古墳群	刃連町	昭34.5.13	古墳時代
ガランドヤ古墳	石井町3	平5.10.13	古墳時代後期、H24.9.19追加指定
小迫辻原遺跡	大字小迫	平8.10.31	弥生～古墳時代
【天然記念物】			
小野川の阿蘇４火砕流堆積物及び埋没樹木群	鈴連町	平23.9.21	約9万年前の阿蘇４火砕流により埋没
【名勝】			
耶馬渓(一部)	東羽田町	大12.3.7	S11.7.14追加指定

【重要無形民俗文化財】			
日田祇園の曳山行事	隈地区・竹田地区・豆田地区	平8.12.20	7月20日以降の土・日曜日 H28　ユネスコ無形文化遺産登録
【重要無形文化財】			
小鹿田焼	源栄町皿山	平7.5.31	9軒の窯元
【国選定重要文化的景観】			
小鹿田焼の里	源栄町皿山・池ノ鶴地区	平20.3.28	H22.2.22 追加選定
【国選定重要伝統的建造物群保存地区】			
日田市豆田町 伝統的建造物群保存地区	豆田町他	平16.12.10	歴史的町並みと伝統的建造物群
【国登録有形文化財】			
井上家住宅　　8件	鶴河内町	平15.1.31	江戸時代後期～大正年間
岩尾家住宅（旧日本丸製薬所）3件	豆田町	平15.1.31	明治初期～昭和初期
隈まちづくりセンター黎明館 1件	隈2	平15.1.31	大正5(1916)年建築
後藤家住宅　　4件	隈2	平20.10.23	主屋は明治20(1887)年建築
山田家住宅　　4件	隈1	平20.10.23	主屋は文化13(1816)年建築
宇野家住宅　　1件	高瀬本町	平20.10.23	昭和2(1927)年建築
長善寺鐘楼門　1件	吹上町	平22.4.28	正徳3(1713)年建築
老松天満社　　4件	天瀬町	平22.9.10	本殿は明治31(1898)年建築
井上酒造店舗兼主屋　3件	大字大肥	平28.8.1	大正3(1914)年建築上棟
【国選択無形民俗文化財】			
豊後の水車習俗	鈴連町ほか	昭58.12.27	小野谷の水車習俗
大分の鏝絵習俗	県内	平８.11.28	大分県内の鏝絵習俗
大原八幡宮の米占い行事	田島町	平11.12.3	粥のカビの状態で その年の豊作等を占う

県指定・県選択

区分、名称又は物件	所在地	指定年月日	摘要（年代ほか）
【有形文化財】			
太刀　銘安綱	豆田町（廣瀬本家）	昭33.3.25	安綱の銘
石人（2体）	銭渕町	昭39.2.21	八女市岩戸山古墳出土
中村文書	豆田町（廣瀬本家）	昭41.3.22	筑前国怡土庄史料
蔵骨器	宇佐市（大分県立歴史博物館）	昭46.3.23	宇佐虚空蔵寺跡出土
軒先丸瓦	宇佐市（大分県立歴史博物館）	昭46.3.23	宇佐虚空蔵寺跡出土
木造阿弥陀如来坐像	大日町	昭47.3.21	応永10(1403)年の銘
老松天満社懸仏	前津江町大野	昭49.3.19	平安後期から鎌倉時代

金凝神社木造仮面	天瀬町本城	昭50.3.28	天狗、翁、鬼、河童の木製面四躯
烏宿神社鰐口	大山町西大山	昭51.3.30	「応年16（1409）年奉納・ 永正2（1505）年寄進」銘
老松神社銅鉾	日田市埋蔵文化財センター	昭51.3.30	長さ70ｃｍで弥生時代の銅鉾
山中薬師堂鰐口	天瀬町出口	昭51.3.30	「享徳2年霜月15日」陰刻銘
草三郎大神宮五輪塔婆附角塔婆	天瀬町馬原	昭51.3.30	「貞和3年3月」銘
玉来神社神像	天瀬町五馬市	昭54.5.15	鎌倉時代から室町時代に製作
森家五部大乗経	宇佐市（大分県立歴史博物館）	昭55.4.8	櫃に「応永23(1416）年」書体・ 室町時代の写本
岳林寺木造明極楚俊坐像	北友田1（市立郷土史料館）	昭56.3.31	南北朝時代
岳林寺絹本著色仏涅槃図	北友田1（市立郷土史料館）	昭56.3.31	室町時代
草野文書	豆田町	昭57.3.30	大友田原氏関係史料
日隈神社平縁細線式獣帯鏡	隈２（日田祇園山鉾会館）	昭58.4.12	中国漢代
大原八幡宮銅鉾	田島町	昭60.3.29	弥生時代後期
西雉谷笠塔婆附 石造塔婆(１基)	上津江町上野田	昭60.3.29	「元亀元(1570）年庚牛10月吉日」銘
石井神社銅鉾	隈２（日田祇園山鉾会館）	平1.3.30	弥生時代後期
朝日宮ノ原遺跡4号中世墓出土品	日田市埋蔵文化財センター	平7.3.10	青磁碗、湖州鏡など81点
ガランドヤ古墳出土品	日田市埋蔵文化財センター	平7.3.10	古墳時代後期
【史跡】			
川原隧道と石畳	天瀬町女子畑川原区	昭51.3.30	江戸末期、新たに築成・ 隧道長さ52ｍ
石坂石畳道	市ノ瀬町・伏木町	昭62.3.27	嘉永3(1850)年の築造
城山古墳	諸留町	平1.3.30	全長29.9ｍの前方後円墳
薬師堂山古墳	田島町	平2.3.29	古墳時代中期
吹上遺跡	大字小迫	平8.3.29	弥生時代中期
朝日天神山古墳	大字小迫	平16.3.30	古墳時代後期の前方後円墳2基
永山城跡	丸山２丁目	平28.2.23	江戸時代初期
【名勝】			
伝来寺庭園	中津江村栃野	昭45.3.31	伝来寺建立以前に築造
【天然記念物】			
津江神社のスギと自然林	中津江村合瀬	昭50.3.28	日田杉の元祖
高塚愛宕地蔵のイチョウ	天瀬町馬原	昭51.3.30	雄株で大小20数本の集合株
鞍形尾神社の自然林	天瀬町馬原	昭56.3.31	神社の北西背後地約１ヘクタール

【無形民俗文化財】			
磐戸楽	三ノ宮1	昭41.3.22	大行事八幡宮の秋祭り 通称「かっぱおどり」
鵜飼	竹田地区	昭41.3.22	5月中頃から10月中頃
大野楽	前津江町大野	昭41.3.22	河童の動作を演技化した雅楽の一種
本城くにち楽	天瀬町本城	昭42.3.31	10月中旬の土日
大原八幡宮御田植祭	田島町	昭59.3.30	4月15日実施
【県選択無形民俗文化財】			
老松様の餅搗祭	中津江村合瀬	昭50.3.28	戦いの様子を模した祭り(7月15日)
老松様の的ほがし祭	中津江村合瀬	昭50.3.28	五穀豊穣と家内安全を祈願(4月15日)

市指定

区分、名称又は物件	所在地	指定年月日	摘要（年代ほか）
【有形文化財】			
開山頂相 （普門寺木造笑巌和尚坐像）	北友田1（市立郷土史料館）	昭47.6.12	応永16(1409)年の銘
龍林寺木造薬師如来坐像付・ 龍林寺薬師如来縁起版木	財津町	昭50.3.28	平安時代後期
石幢	上野町	昭50.3.28	長禄4(1460)年の銘
永平寺跡板碑	高瀬本町	昭50.3.28	応長元(1311)年等の銘
絹本着色明極楚俊坐像	北友田1（市立郷土史料館）	昭55.2.13	室町時代
宝篋印塔	神来町	昭57.5.11	貞和3(1347)年の銘
大原八幡宮	田島町	平1.11.22	楼門、拝殿、幣殿、本殿
大般若波羅密多経	田島町	昭47.6.12	神宮寺、写経600巻
吹上観音坐像	吹上町（吹上神社）	昭50.6.10	平安時代後期
玉来神社拝殿と棟札	天瀬町五馬市	昭51.11.20	神殿を含め80アール・ 棟札に「応仁2（1468）年」銘
宝筐印塔	中津江村合瀬	昭51.11.1	鎌倉時代作・高さ約1.37m、 笠は上部5段、下部2段
間地橋	中津江村栃野・合瀬	昭51.11.1	中津江村内で唯一の石造アーチ橋
先祖元、五輪塔（３基）	上津江町上野田	昭54.7.26	風化作用等により形や文字等 全く判明せず
十一面観世音菩薩座像（１体）	上津江町上野田	昭54.7.26	「天文17(1548)年創立」墨書銘
木造釈迦三尊像(附) 釈迦如来像奉篭物	北友田１（市立郷土史料館）	昭55.2.13	康永2(1343)年
木造大日如来坐像	山田町	昭55.9.3	天文10(1541)年の銘
木造毘沙門天立像	山田町	昭55.9.3	天文16(1547)年の銘
紙本墨書明極墨蹟	北友田１（市立郷土史料館）	昭55.2.13	南北朝時代
岳林寺文書	北友田１（市立郷土史料館）	昭55.2.13	慶長～明治

紙本西国筋郡代陣屋絵図	隈1	昭57.5.11	文化14年～天保4年頃
大野老松天満社逆修塔	前津江町大野	昭57.9.21	地輪、水輪、火輪には それぞれ四方に梵字
懸仏（御前嶽神社）	前津江町柚木	昭57.9.21	平安後期から鎌倉時代、13面
木造薬師三尊像	南友田町	昭58.7.13	平安時代
金銅筒臑当	宇佐市(大分県立歴史博物館)	昭58.7.13	鎌倉時代
方格規矩鏡片	田島町	昭58.7.13	草場遺跡出土
須恵器子持高坏	吹上町	昭58.7.13	(伝)北友田横穴墓出土
浦宮神社「拝殿・神殿」	上津江町川原	昭58.6.28	拝殿は入母屋造り・神殿は流造り
浦宮神社「せり持ち式石橋」	上津江町川原	昭58.6.28	旧参道北側の谷川
宝筐印塔	前津江町柚木	昭61.3.17	総高55cm余り・南北朝ないし 室町時代造立
大友書状	日田市埋蔵文化財センター	昭61.3.17	前津江町柚木に残る 天正12年以降に贈ったもの
百姓日記	日田市埋蔵文化財センター	昭61.3.17	前津江町柚木に残る 元禄より宝暦まで60年間の記録
穴井家古文書一巻	北友田1（市立郷土史料館）	昭62.4.20	延享3（1746）年の直訴状、 会合証文の写し
有田古墳出土一括遺物	本町	平1.11.22	古墳時代
大乗妙典経	前津江町柚木	平2.3.8	妙法蓮華経八巻・ 正徳5（1714）年奉納
岳林寺木造弥勒菩薩坐像	北友田１（市立郷土史料館）	平3.3.30	応永30(1423)年作
世尊寺木造薬師如来坐像他２体	諸留町	平4.3.10	天文16(1547)年、 弘治3(1557)年
内河野村古絵図	日田市埋蔵文化財センター	平4.3.10	江戸時代
四季農耕図絵馬	前津江町柚木	平11.10.25	横長の画面に稲作の行程等を描写
中西村・梅野村の絵地図	中津江村合瀬	平11.4.7	延宝5年（1677） 梅野村庄屋七郎兵衛外3人により作成
天井絵馬	前津江町柚木	平12.12.8	享保時代
像代	前津江町大野	平12.12.8	神や人の代わりに祭るもので 人形に作られた木像
どうぼう様（藤房様４体）	前津江町柚木	平13.11.14	南北朝時代
元大原神社	神来町	平14.3.7	神殿、幣殿、拝殿、水盤舎、神輿蔵 宝暦10（1760）年再興
求来里笠塔婆	神来町	平14.3.7	観應元（1350）年墨書銘
木造釈迦如来立像	北友田１（市立郷土史料館）	平23.3.31	鎌倉時代
伝姫塚古墳出土鉄剣（蛇行剣）	日田市埋蔵文化財センター	平23.5.31	古墳時代
木造阿弥陀如来坐像	高瀬本町	平28.3.25	鎌倉時代後期
【有形民俗文化財】			
おきあげ人形製作資料	有田町	令1.7.25	明治後期から昭和中期頃までに作られた おきあげ人形と下絵及びその製作用具

【無形民俗文化財】			
有田町若八幡社やっこ振り行列	有田町	平3.3.30	若八幡社秋祭り(10月下旬)
出口本村楽	天瀬町出口	平6.4.29	隔年10月24，25日
出口袋七夕楽	天瀬町出口	平6.4.29	隔年10月24，25日
五馬楽	天瀬町五馬市	平6.4.29	10月26、27日
烏宿神社はだか参り	大山町西大山	平25.3.28	12月14日夜に締め込み姿の男衆が 参道を駆ける
【史跡】			
丸山古墳	城町2	昭47.6.12	古墳時代中期
片山磨崖種子	北友田2	昭50.3.28	康永3(1344)年の銘
惣田塚古墳	琴平町	平1.11.22	古墳時代後期
三郎丸古墳	北友田2	平1.11.22	古墳時代後期
菊池七人塚	中津江村合瀬	昭51.11.1	塚は2m四方程で自然石を 7個環状に立てている
御所跡と御所の谷	中津江村合瀬	昭51.11.1	御所跡は200㎡程の平坦地
年の神境内地伝、 相垣越前守の墓（１基）	上津江町上野田	昭54.7.26	「間部越前守義直」の供養塔
台の殿様屋敷跡	前津江町大野	昭57.9.21	津江殿の館跡
平島古墳	諸留町	平1.11.22	古墳時代後期
木地師半兵衛 ・徳兵衛の墓（２基）	上津江町川原	平1.7.5	表面上部に菊の御紋とみられる印
宇土遺跡３号墳	天瀬町五馬市	平3.10.29	古墳時代（5世紀中頃～後半）
筑前台岩木塁遺跡	天瀬町馬原	平3.10.29	山頂2000㎡
牧原千人塚	桃山町	平7.3.31	室町時代
小竹供養塔（１基）	上津江町川原	平11.8.9	土台5cm～30cm大の高まりの上に 正面西向き
姫塚古墳	高瀬本町	平19.3.29	古墳時代中期の円墳
台神社前旧往還石畳道	天瀬町女子畑台	平28.3.25	旧往還石畳道　約41m

【天然記念物】			
むらくもの松	隈2（八坂神社）	昭47.6.12	樹齢300年以上
台神社の森	天瀬町女子畑台	平28.3.25	旧日田往還添い・熊野神社の境内林
見竹天満宮の天満かつら	天瀬町出口	昭54.3.20	胸高樹周4.5m、樹高推定20m余、 樹齢不詳
年の神境内地樹林（26本）	上津江町上野田	昭54.7.26	カヤの推定樹齢は500年以上
浦宮神社境内地 「樹林・下草シダ類」	上津江町川原	昭58.6.28	県の特別保護樹林「津江大杉の森」と指定
ユズリハ自然林	前津江町大野	昭61.3.17	ユズリハを優占種とする自然林
桂の木	前津江町柚木	平2.3.8	幹周り10m、樹高20mの雌の桂
烏宿自然林	大山町西大山	平4.9.18	森林構成樹種約158種
銀杏の木	中津江村栃野	平9.1.27	樹齢600年（推定）
杉	前津江町柚木	平12.12.8	樹齢600年（推定）
ズミの群生地	伏木町	平15.3.26	自生の南限地
エドヒガンザクラの木	上津江町川原	平16.10.8	樹齢300年（推定）
ムクの木	上津江町川原	平16.10.8	樹齢不明
手水野のカツラ林	上津江町川原	平16.10.8	樹齢不明
小平のカツラ林	上津江町川原	平16.10.8	樹齢不明
モミの木	上津江町川原	平16.10.8	樹齢不明
スギの木	上津江町川原	平16.10.8	樹齢120年（推定）
イチョウの木	上津江町川原	平16.10.8	樹齢不明
モミジの木	上津江町上野田	平16.10.8	樹齢不明
アカマツの木	上津江町上野田	平16.10.8	樹齢約90年(推定)

Ⅲ．普及・啓発

1．文化財講演会

市では、地域に残された貴重な宝である様々な文化財を、観光などの他の分野とも連携し、地域総がかりで将来への保存・活用に繋げていくため、「日田市文化財保存活用地域計画」を作成し、令和６年12月20日に文化庁長官から認定を受けた。

この計画を広く市民の皆さんに知っていただくとともに、地域の宝をこれから、どのように継承していくのかを一緒に考えるための講演会を令和７年３月９日（日）に開催した。

講演会では、福岡大学名誉教授で日田市文化財保存活用地域計画協議会委員の武末 純一先生に「地域の宝を活かした新たなまちづくり」と題し、住民が文化財の保存・活用に参画した事例や住民参画によるまちづくりの中で計画を見直す必要性について、講演していただいた。

▲講演会チラシ

▼文化財講演会風景

2.古文書入門講座

市民に向けて、古文書を通じて日田市や大分県の歴史と文化に触れる機会を作ることを目的に、古文書の読み解きについて未経験者の方にも、初歩から分かりやすく解説する初心者向けの入門講座を開催した。

≪令和６年度≫

開催場所 ： 日田市役所本庁７階大会議室ほか
開 催 日 ： 10月21日～12月６日
申込者数 ： 44名

≪令和７年度≫

開催場所 ： 日田市役所本庁７階大会議室ほか
開 催 日 ： ８月29日～11月25日
申込者数 ： 52名

[講義内容]

≪令和６年度≫

	日　時	内　容	講　師	受講人数
第1講	10月21日（月） 14：30～16：00	「中世文書から 日田森家のルーツを探る」	大分県立先哲史料館 松尾 大輝 氏	37
第2講	10月28日（月） 14：30～16：00	「初期明治の手習本を読む、 日田蒲池家文書を読む、 井上準之助書簡を読む」	大分県立先哲史料館 手嶋 義文 氏	31
第3講	11月8日（金） 14：30～16：00	「日田の戦国～財津野上文書より～」	大分県立先哲史料館 松原 勝也 氏	31
第4講	11月15日（金） 10：00～17：40	【バス研修】 特別展示「光と紫～描かれた源氏物語～」 秋季企画展「縁起が語るもの」	大分市歴史資料館 大分県立先哲史料館	17
第5講	11月26日（火） 14：30～16：00	「大原八幡宮の絵図を読む」	大分県立歴史博物館 村上 博秋 氏	30
第6講	12月6日（金） 14：30～16：00	「幕末期の豊前海沿岸における新田開発」	大分県立歴史博物館 平川　毅 氏	25

▲手嶋 義文 氏（第２講）

▲村上 博秋 氏（第５講）

▲平川　毅 氏（第６講）

▲バス研修風景（第４講）

≪令和７年度≫

	日　時	内　容	講　師	受講人数
第1講	8月29日（金） 9：40～17：00	【バス研修】 企画展「宇佐のいのり-神仏をみつめる-」 宇佐神宮 散策	大分県立歴史博物館 宇佐神宮	28
第2講	9月3日（水） 14：00～15：30	「豊後国日田郡の産物の事 ―大蔵永常『広益国産考』を読む―」	大分県立先哲史料館 村上 博秋 氏	41
第3講	10月7日（火） 14：00～15：30	「重光葵の史料を読む」	大分県立先哲史料館 松原 勝也 氏	43
第4講	10月21日（火） 11：30～17：00	【バス研修】 特別展「法然と極楽浄土」 施設見学	九州国立博物館 太宰府市公文書館	22
第5講	11月7日（金） 14：00～15：30	「古文書が語る大友氏の存亡」	大分市歴史博物館 小野本 慎 氏	38
第6講	11月25日（火） 14：00～15：30	「秋月藩の古文書を読む」	朝倉市秋月博物館 佐々木 隆良 氏	38

▲松原 勝也 氏（第３講）

▲小野本 慎 氏（第５講）

▲佐々木 隆良 氏（第６講）

▲バス研修風景①

◀ バス研修風景②

3.考古学講座「タイムトリップひた」

「考古学」や「郷土の歴史」に対する関心を深め、身近な遺跡や埋蔵文化財への興味とその保護の必要性への理解を高めることを目的として実施。

≪令和６年度≫

開催場所 ： 日田市役所本庁７階大会議室ほか

開 催 日 ： 10 月９日～11 月 27 日

申込者数 ： 59 名

≪令和７年度≫

開催場所 ： 日田市役所本庁７階大会議室ほか

開 催 日 ： 10 月８日～12 月３日

申込者数 ： 50 名

[講義内容]

≪令和６年度≫

	日　時	内　容	講　師	受講人数
第1講	10月9日（水） 18：00～19：30	律令社会と豊後国日田郡	別府大学教授 田中 裕介 氏	53
第2講	10月23日（水） 18：00～19：30	豊後国日田郡の律令社会と遺跡	日田市教育庁文化財保護課 行時 桂子	35
第3講	10月30日（水） 18：00～19：30	近隣地域の律令社会1 豊前国下毛郡の律令社会と遺跡	中津市歴史博物館 丸山 利枝 氏	43
第4講	11月13日（水） 12：00～17：00	【バス研修】 今に残る律令社会の痕跡 九州総領の迎賓館「鴻臚館（筑紫館）」跡と福岡市博物館見学	（鴻臚館跡） 福岡市史跡整備活用課 本田 浩二郎 氏	39
第5講	11月27日（水） 18：00～19：30	近隣地域の律令社会2 豊後国大分郡・海部郡の律令社会と遺跡	大分市教育委員会 池邉 千太郎 氏	33

▲第１講の様子

▲第４講の様子

▲池邉 千太郎氏（第５講）

≪令和７年度≫

	日　時	内　容	講　師	受講人数
第1講	10月8日（水） 18：00～19：30	「戦国時代から近世社会の成立と永山城」	別府大学教授 上野 淳也 氏	44
第2講	10月22日（水） 18：00～19：30	「江戸幕府直轄地の国際貿易港 -長崎と出島-」	長崎市文化観光部文化財課 田中 亜貴子 氏	39
第3講	11月5日（水） 18：00～19：30	「発掘調査成果から見た天領日田」	日田市文化スポーツ観光部 文化財課 上原 翔平	25
第4講	11月19日（水） 12：00～16：30	【バス研修】 周辺地域の江戸時代の暮らし	朝倉市秋月博物館 乙藤 慎 氏	36
第5講	12月3日（水） 18：00～19：30	「発掘調査からみた 久留米城下町の人々の暮らし」	久留米市市民文化部 文化財保護課 小川原 励 氏	36

▲第１講の様子

▲第２講の様子

◀ 第4講の様子

4.日田市埋蔵文化財センター企画展

≪令和６年度≫

「BUNGOHITA - ひたの律令社会をとりまく遺跡たち - 」

令和４・５年度に日田市教育委員会が発掘調査を行った奥谷遺跡では、古代（奈良・平安時代）を中心とする小さな集落が発見され、役所・寺院など公的施設以外では通常見られることのない瓦が出土した。これに因み、市内で公的施設と目されている遺跡について、出土遺物や写真パネルなどで紹介を行った。

開催場所 ： 日田市埋蔵文化財センター企画展展示室

開催期間 ： 令和６年 10 月７日（月）～令和７年３月 31 日(月)

展示遺跡 ： 奥谷遺跡、大肥吉竹遺跡、銭渕遺跡、大波羅遺跡など

≪令和７年度≫

「天領日田を彩る遺跡たち-豆田町を中心とした江戸幕府直轄地の栄えた暮らし-」

令和 6 年度の長福寺などに代表される江戸時代の豆田町や永山城などの発掘調査事例が近年増加していることから、豆田町を中心に江戸幕府直轄地の繁栄した人々の暮らしを発掘調査の出土遺物、写真やパネルで紹介を行った。

開催場所 ： 日田市埋蔵文化財センター企画展展示室

開催期間 ： 令和７年 10 月６日（月）～令和８年３月 31 日(火)

展示遺跡 ： 長福寺、城下町遺跡（1～2 次）、永山城跡、永山布政所跡など

5. 文化財防火デー

文化庁と消防庁は、文化財を火災、震災その他の災害から守るとともに、全国的に文化財防火運動を展開し、国民一般の文化財愛護に関する意識の高揚を図ることを目的に、法隆寺金堂の焼損した日であること、１月と２月が１年のうちで最も火災が発生しやすい時期であることから、１月 26 日を「文化財防火デー」と定めている。

日田市文化財（保護）課においても、文化財を守るため、所有者や地域住民、関係機関、団体と協力することで、非常災害時の迅速な防火・防災体制を確立するため、毎年の「文化財防火デー」に合わせ、文化財防火訓練を実施した。

≪令和６年度≫

「日田市立郷土史料館」防火訓練

［日　時］　令和７年１月 24 日（金）　10 時 00 分～11 時 40 分

［主催者］　日田市教育委員会

［内　容］　第一発見者による消防署への通報、見学者の避難誘導及び近隣住民による初期消火活動を想定した訓練を実施。住民による消火器の操作訓練も実施。

［場　所］　日田市立郷土史料館

［参加者］　北友田一丁目自治会及び地域住民、日田玖珠広域消防組合日田消防署、有限会社 加藤電工、市文化財保護課職員

訓練風景

≪令和７年度≫

「大野老松天満社旧本殿」防火訓練

［日　時］　令和８年１月 25 日（日）　10 時 00 分～11 時 30 分

［主催者］　日田市

［内　容］　第一発見者による消防署への通報、見学者の避難誘導及び近隣住民による初期消火活動を想定した訓練を実施。

［場　所］　国指定重要文化財「大野老松天満社旧本殿」

［参加者］　大野老松天満社氏子、前津江町大野地域住民、前津江第一分団、日田玖珠広域消防組合日田消防署、日田消防署大山出張所、前津江振興局、有限会社 加藤電工、前津江振興局、市文化財課職員

訓練風景

Ⅳ．文化財（保護）課事業の概要

【文化財管理係】

①文化財保存活用地域計画作成事業

（※令和７年度より文化財保存活用地域計画推進事業に変更）

市内に所在する文化財を調査・把握し、総合的・一体的に捉え、観光などの他分野と連携しながら、地域総がかりで将来への保存・活用につなげていくため、「日田市文化財保存活用地域計画」を作成し、計画に基づき措置（事業）を実施した

≪令和６年度≫

パブリックコメントの実施　（　４月１５日～５月１４日）
協議会の開催、最終案の決定　（　６月１４日）
文化財保護審議会の答申　（　７月２６日）
文化庁長官による認定　（１２月２０日）
庁内部会の開催　（　１月２２日）
文化財講演会の開催：来場者５８名（　３月　９日）

≪令和７年度≫

計画書（本編・概要版：200 部）の刊行　（１０月）
協議会の開催　（　３月２３日）

②文化財公開施設害虫防除対策事業

指定・未指定の文化財を収蔵する施設で、文化財に対する有害生物を殺虫・防虫するために燻蒸を行った。

≪令和６年度≫

慈眼山永興寺仏像収蔵庫、前津江郷土文化保存伝習施設

≪令和７年度≫

日田市立郷土史料館

③公共文教施設災害復旧事業

令和６年７月の大雨で被害を受けた県指定史跡「石坂石畳道」及び令和７年８月の大雨で敷地内に土砂が流入した国指定重要文化財「行徳家住宅」の復旧工事を行った。

≪令和６年度≫

〇石坂石畳道・・・・土砂・倒木・落石の撤去、石積みの復旧及び排水管の埋設

≪令和７年度≫

〇行徳家住宅・・・・土砂撤去、土嚢設置

【埋蔵文化財係】

①市内遺跡等調査事業

各種開発に伴う事前の予備調査等を実施した。

≪令和６年度≫

〇文化財保護法の規定による届出等の照会文書

・・・・　２１４件　（民間１７５件、公共３９件）

〇開発に伴う予備調査（確認・試掘・立会調査）

・・・・　２７件　（民間　２４件、公共　３件）

≪令和７年度≫（１月末時点）

〇文化財保護法の規定による届出等の照会文書

・・・・　１９２件　（民間１１１件、公共８１件）

〇開発に伴う予備調査（確認・試掘・立会調査）

・・・・　１８件　（民間　１３件、公共　５件）

〇遺跡地図高精度化作業に伴う委託（WebGIS 公開　令和９年予定）

②史跡小迫辻原遺跡整備事業・保存管理事業

国指定史跡小迫辻原遺跡の報告書作成（１/３冊Ｒ８刊行予定）し、ボランティアによる花植等を行い史跡の維持管理を図った。

≪令和６年度≫

出土遺物整理作業、遺物実測等委託（３分冊１）、景観美化活動

≪令和７年度≫

出土遺物整理作業、遺物実測等委託（３分冊１）、景観美化活動

③ガランドヤ古墳群保存整備事業、古墳公園維持管理事業

国史跡に指定されているガランドヤ古墳群の保存整備を進め、貴重な歴史的遺産として後世に保存・継承するとともに、児童・生徒をはじめとした市民等の歴史学習の場並びに公園としての活用を図った。

≪令和６年度≫

２号墳環境調査委託、１号墳一般公開（４３２人）

≪令和７年度≫

２号墳環境調査委託、１号墳一般公開（３０４人）１月末時点

【町並み保存係】

① 伝統的建造物群保存事業

歴史的な町並み景観を文化財として後世に残し、誇りと愛着を持てるまちづくりを目的として、伝統的建造物の保存修理工事や木造建築物が密集する地区に屋外消火栓を設置する防災事業を実施した。

≪令和６年度≫

保存修理工事　：３件・・・草野家長屋Ａ棟、赤司家主屋北棟、赤司家主屋

屋外消火栓設置：３基・・・累計３９基設置済み（計画４８基）

≪令和７年度≫

保存修理工事　：２件・・・田嶋家主屋、冨安家座敷棟屋根

屋外消火栓設置：３基・・・累計４２基設置済み（計画４８基）

② 史跡廣瀬淡窓旧宅及び墓保存整備事業

国史跡廣瀬淡窓旧宅及び墓の南家主屋は、経年劣化等による損傷が著しいことから、令和６年度から令和８年度にかけて保存修理工事を実施した。

≪令和６年度≫

南家主屋を半解体し、沈下した構造部分の不陸を調整した上で、柱や梁、壁などの補強工事を実施した。

≪令和７年度≫

屋根瓦を葺替え、土壁の下地組、下塗り、中塗り、乾燥を実施した。

※上記は、各係がそれぞれの年度で取組んだ事業の一部です。

日田文化　第六十八号

令和八年三月掲載

編集　日田市文化スポーツ観光部　文化財課

発行　日田市

〒八七七－八六〇一

大分県日田市田島二丁目六－一